

<退任最終講義>

## 第二次世界大戦以降の アメリカ小説の動向

伊藤 貞基

本日は、以前に文学史関係の仕事をした際の資料を使って、第二次世界大戦以降のアメリカ小説の流れ（動向）について極めて太雑把に話してみたいと思います。時間の関係上、要点にしか触れられないでしょうし、また、どこまでお話出来るか分からないので、全体としての動向およびそのそれぞれに属する作家名などを参考資料1に挙げておきましたので、参照しながらお聞き下さい。

さて、第二次世界大戦後のアメリカ小説は、戦後の政治や経済、そして社会変化に応じて、参考資料1のように、4つの時期に分けて考えると分かりやすいと思われます。

まず、第1の時期について

▽1945年——1960年頃まで

この時期は、東西対立の冷い戦争が生みだした順応主義の時代を背景とします。ハリウwoodsの赤狩り（1947）、マカーシーによる「魔女狩り」（1950-1954.12）などのため国民が the silent generation となった時代です。体制に対する良識的な批判勢力であるべき知識階級も *The Partisan Review* 誌の「アメリカとアメリカ文化についてのシンポジウム」（1952）に見られるように、大半は体制順応的な姿勢をとります。こうして、戦後の経済的繁栄で豊かな生活を享受するようにはなったものの、戦後の国際政治や高度に管理

された産業主義社会が持つ、個人を押しつぶすような巨大な力や機構を前にして、人びとは自我の喪失感を覚えるようになります。

【戦争小説】 こういった時代環境の中で、まず、戦争の直接的な産物として第二次世界大戦を題材とした多くの戦争小説が書かれました。Norman Mailer (1923- ) の『裸者と死者』 (*The Naked and the Dead*, 1948), James Jones (1921-1977) の『ここより永遠に』 (*From Here to Eternity*, 1951, NBA), Herman Wouk (1915- ) の *The Caine Mutiny* (1951, Pulitzer Prize) などです。また、朝鮮戦争 (1950.6-53.7) を題材にする小説も書かれました。

戦争小説には、戦闘ものと、戦争全体を政治・社会的に捉えるもの、という2つのタイプがありますが、時代環境のせいでしょうか、この時期のアメリカの戦争小説には、軍隊・戦争を一つの社会・政治機構と見、その中における機構と個人との間の相克を描くという特徴を示しているようです。例えば、戦後の戦争小説中の最高の傑作と言われ、作者の Mailer を一躍人気作家にした『裸者と死者』は、戦闘ものに属しますが、戦場という極限状況下にある人間心理と狂気だけではなく、軍隊機構やその背後の一般社会に潜む権力と自由との衝突をカミングズ将軍、ハーン中尉、クロフト軍曹などという登場人物を介して見事に描き込んでいます。

【南部小説】 次に Eudora Welty (1909-2001), Carson McCullers (1917-1967), Flannery O'Connor (1925-1964), Truman Capote (1924-1984) などの南部作家達、とくに女性作家たちの盛んな活躍があります。アメリカの中の外国と言われたこともある南部の歴史や伝統、その特異な地域性や精神風土を彼らはユーモアを交えた鋭い筆致で描き出しました。南北戦争の敗戦による挫折感、奴隷制に対する罪の意識、農業中心のため急速な産業主義の発展の中でとり残され、そのため生じた経済の地盤沈下と文化的後進性、こういった要件から南部の文学は、一般的に言って、古き良き時代の南部の文化と伝統への執着を示すと言われていました。しかし、ノスタルジーに耽るだけでなく、南部の過去へのこだわりや、その後進性が生み出すグロテスクな退廃や暴力へも鋭い目を向けるようになりました。南部の経済的、文化的被抑

圧を人間の自己実現からの疎外や孤独という形で捉えているところに、地域性を超えた彼等の作品の価値があります。

今述べました4人以外では、現在活躍中で、日本でも少しは名前を知られている作家に、テネシーを描き続ける Peter Taylor (1917- ), ミシシッピの作家 Ellen Douglas (1921- ) がいます。ほかにも、William Styron (1925- ), また、60年代に入るとカトリック作家の Walker Percy (1916-1990) が出てきます。ただし、2人ともその作品は南部という地域性の枠を超えた普遍性を具えています。

【黒人文学】この時期に興隆してきた黒人文学にとって、人間の自己実現の問題はその最大のテーマでした。自由の為の戦いであった第二次世界大戦への彼らの貢献、大戦中のナチスによるユダヤ人の大量虐殺などが、戦後のアメリカで人種差別や不平等への反省を生み、これが黒人文学の興隆に与っています。作家としては Richard Wright (1908-1960), Ralph Ellison (1914-1994), James Baldwin (1924-1987) などです。

第二次世界大戦後における黒人小説興隆の萌芽は、遠くは、アメリカの黒人たちの黒人意識を高揚させた1920年代の Harlem Renaissance に、近くは、30年代に人種差別に抗議の声を挙げ、短編集 *Uncle Tom's Children* (1938) や『アメリカの息子』(*Native Son*, 1940) を書いた Wright の活躍の中に見られます。人種差別という犯罪的行為を黒人に押しつけているアメリカ社会での黒人の自由は、反社会的な形でしか許されないということを描いた『アメリカの息子』は、発表されるや忽ちベストセラーとなり、後の抗議小説の原型となりました。しかし、戦後の黒人小説は、直接的な抗議の姿勢を取るよりは、抑圧された社会階級として生きている黒人のあるがままの生活や彼らの人間としての自己実現の夢を描こうとする傾向を見せます。すぐれた作品としては、Ellison の『見えない人間』(*Invisible Man*, 1952, NBA), Wright の『アウトサイダー』(*The Outsider*, 1953), あるいは、抗議小説は人生や人間を類型化しがちであると批判し、一個の人間としての黒人の姿を深く掘り下げようとする Baldwin の自伝的な小説『山に登りて告げよ』(*Go Tell It*

*on the Mountain*, 1956) と『ジョヴァンニの部屋』(*Giovanni's Room*, 1956) などがあります。黒人の人間性を認めてはじめて、白人は人間性を回復できると考える Baldwin の場合にはさらに、この当時においてはタブー視されていた白、黒、両人種間の異性愛や同性愛を描いた異色作『もう一つの国』(*Another Country*, 1962) すらあります。

[リアリズムの復活] この時期には、戦前からの大家達——20年代のモダニズムの流れを汲む William Faulkner (1897-1962), Ernest Hemingway (1899-1961), 19世紀末の環境決定論に立脚する自然主義の流れを汲む John Steinbeck (1902-1968) ——の活躍も続き、彼らはそれぞれ1949年, 1954年, 1962年にノーベル賞を受賞します。しかし、これらの大家達の形式を重視するモダニズム、そして、環境決定論的な自然主義は、いずれも戦後の大きな政治的、社会的変化や道徳的变化の多様性に十分に対応しきれなくなってきました。こうして、東西対立の冷戦の中で、イデオロギーに囚われないリベラルな想像力の必要性が主張され、サルトル、カミュの実存主義的リアリズムの影響を受けてリアリズムが復活してきます。戦後世代の若い作家達、先ほど名前を挙げました Norman Mailer や Jerome David Salinger (1919- ) などの登場です。

Mailer は、戦後のアメリカの社会的、政治的変化に最も敏感に反応した作家で、科学技術、権威主義、大衆社会的価値観などによる人間性侵害に強く反発します。また、自己顕示欲が強く、それが社交界への派手な話題の提供、積極的な政治活動への参加という形をとって表れています。1967年の『なぜぼくらはヴェトナムへ行くのか』(*Why Are We in Vietnam?*) 以後しばらく小説を離れ、エッセイを書いたり、自分自身を作中に Mailer として登場させ、その感性を通して、見聞する事件や出来事を語るというニュージャーナリズム(『夜の軍隊』*The Armies of the Night*, 1968, 『月にともる火』*Of a Fire on the Moon*, 1970) に熱中したりしましたが、これも一つにはこの自己顕示欲のせいかも知れません。1951年発表の『バーバリの岸辺』(*Barbary Shore*) という作品は、東側世界のスターリン (1953年死亡) の恐怖と粛清による鉄

の支配と、西側世界の赤狩りに象徴される資本主義的全体主義の悪夢の時代を背景に、両者は双生児であって、そのいずれにもあるのは政治的不毛であり、このままでは人類が行き着くのは「野蛮状態の岸辺」であるという認識を示したものです。また、1965年発表の小説『アメリカの夢』(*The American Dream*)は、マルキスト的実存主義者を自称し、「白い黒人」(‘White Negro,’ 1957) 待望論を書いた Mailer の、もっとも実存主義的な小説で、古いアイデンティティーを捨て、危険を犯して自己の精神的再生を計ろうとする男の物語です。

Salinger は1951年発表の『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*)によって一躍大学生世代の人気者となりました。この作品はペンシルヴァニア州にある進学校の16才の少年が成績不良で退学処分通告を受けてから、寮を出、両親と幼い妹の住むニューヨークに戻り、そこで3日間放浪した間の出来事を、何カ月か後に、入院させられている先の西海岸のクリニックで振り返るという形を取ります。主人公が出会すのは大人達の世界の偽善や「いんちきさ (‘phony’)」加減で、そのような世界に主人公は不信と反発を覚え、西部へ行く決心をします。しかし、出かける前に密かに会いに行った幼い妹の学校で、純真であるべき筈の子供達の世界すら大人達の世界の「薄汚さ」に汚されている証拠(下品な性的落書き)を見て、彼は子供達の守り手になる決心をして家に戻ります。一般的には通過儀礼をテーマとする小説は、主人公の無垢の喪失、大人達の世界への適応の拒否という形をとるものですが、この小説の主人公は大人になることを徹底的に拒否しようとし、この点が、順応の時代や大衆社会の中に住む人々の人間性回復の願いと通じあい、この小説の人気のもととなったのではないかと思われます。生き生きとした口語体英語の見事さでも知られています。

【不条理の文学】この時期は、また、戦争が齎す不条理性、第二次世界大戦中のアウシュヴィッツ、ヒロシマ、ドレスデンという3大悪夢、また、戦後のローゼンバーグ事件(1951)のような共産主義ヒステリーの悪夢、戦後の産業主義社会がもたらした様々な矛盾などの影響で、人間存在の不条理性

を描こうとする、いわゆる「不条理小説」が書かれるようになります。神や神に代わるいかなる超越的存在も想定せず、神の喪失が人間から確信を奪った世界における人間存在を理由なきもの、と考えるところから出発する不条理の文学は、人間存在の不条理性の発見、それとの葛藤、そして解決不可能な存在の不条理性にどう対処するか、に関わります。したがって、主人公の不条理への対処の仕方によって 1) 不条理の発見とその受諾（その理由なき犠牲者）2) 不条理への反抗から、それへの妥協 3) 実存的に生き抜くことを通しての不条理への反抗 という3つのタイプに分け得ます。1) のタイプに属するものとしては、Saul Bellow (1915-2005, Nobel Prize in 1976) の『宙ぶらりんの男』(*Dangling Man*, 1944), William Styron の『闇の中に横たわりて』(*Lie Down in Darkness*, 1951), Ralph Ellison の『見えない人間』2) としては、Bellow の『オーギーマーチの冒険』(*The Adventures of Augie March*, 1953, NBA), 『雨の王ヘンダスン』(*Henderson the Rain King*, 1959), John Updike (1932-) の『走れ、ウサギ』(*Rabbit, Run*, 1960), Walker Percy の *The Moviegoer* (1961, NBA) など 3) としては、Richard Wright の『アウトサイダー』, Salinger の『ライ麦畑でつかまえて』, Mailer の『アメリカの夢』, Joseph Heller (1923-99) の『キャッチ=22』(*Catch-22*, 1961), J. P. Donleavy (1926-) の『赤毛の男』(*The Ginger Man*, 1958) などです。幾つかの作品に触れておきます。

William Styron の『闇の中に横たわりて』は、憎み合う両親の間で愛の葛藤に引き裂かれ、また、烈しく移り変わる世の中についていけなくなり、全裸でニューヨークのビルから飛び降り自殺する22才の南部女性の物語です。なお、付け加えますと、Styron は、現代人が直面する精神的苦悩を実存的に描くのに優れ、他に、ナチスの死の収容所で、2人の子供のうちの1人を死者の列に送り込むという選択を強いられ、そのため戦後もその罪の意識を引きずって生き、結局は悲劇的な死にいたる女性を描き、存在とは何かということを問いかけた小説『ソフィーの選択』(*Sophie's Choice*, 1979, NBA), また、黒人有識層からの反発を買うことになりましたが、19世紀に実際に起

こった黒人暴動の指導者を、愛する者でも白人女性であるが故に殺さざるを得なかった苦悩の人として描いた小説『ナット・ターナーの告白』(*The Confessions of Nat Turner*, 1967, Pulitzer Prize) などがあります。

Saul Bellow の『雨の王ヘンダスン』は、すべてに恵まれた55才の初老の主人公が、内面からわき起こる欲求不満の声に駆り立てられてアフリカまで出かけ、数々の冒険を経た後、人生の意味らしいものを悟り、医者になる決意を固めて帰国するという話です。

Walker Percy の *The Moviegoer* は、日常性からの脱却を映画という代償行為の中に求めていた主人公が、生の充実感を求めて生の「探求」を始め、それを精神的に不安定な娘との結婚の中に見出そうとするという筋で、カトリック作家の Percy の場合、生の「探求」とは神の探求に繋がります。Percy の魅力は、現代人の自己疎外の問題を取り上げ、自己疎外からの脱出、現実世界への再入の可能性を探っている点にあります。

【ビート世代の小説】次に、ビート世代の小説に触れておきます。

戦後世界の二極構造化がもたらした東西両陣営間の冷戦による順応主義や物質主義的な風潮に対して、戦後に成人に達した若者達が世界各地で反抗の声を挙げ、イギリスでは「アングリー・ヤングメン」、日本では「太陽族」などを産みだし、アメリカでは「ビート・ジェネレーション」と呼ばれる世代が出現します。この名前の由来については「打ちのめされ=beaten」の意だ、ジャズの「ビート」の意だ、いや、「至福の=beatific」の意だ、といろいろに言われていますが、要するに彼らは中流階級的な価値観や物質主義を否定し、そういったものからの精神的「解脱」を主張する世代で、メイラーの言うヒップスター的に生きることを目指します。60年代に現れたヒッピーの先達ですが、中流階級出身の若者が多く、ヒッピーに比べてそれほど戦闘的などころはなく「離脱的」で、世間的常識を離れ、放浪し、麻薬による意識拡大を計ろうとした世代です。彼らを代表するのは、小説では Burroughs (1914- ) と Kerouac (1922-69) で、Burroughs には「カットアップ」と呼ばれる実験的な手法で書かれた、麻薬中毒者の世界を描いた『裸のランチ』

(*The Naked Lunch*, 1959), Kerouac には車を駆って大陸を横断し、メキシコにまで至る 2 人の若者の交遊を描き、この世代の聖典とまで言われた『路上』(*On the Road*, 1957) という小説があります。

次に第 2 の時期について

▽1960年頃——1970年代半頃まで

順応の時代に山積したさまざまな国内問題が一気に表面化し、改革を求めて一層の激しさを増す公民権運動が各地で頻発し、その一方ではキューバ危機 (1962) により核の恐怖を実感させられ、挙げ句の果てにはケネディ大統領をはじめとする一連の暗殺事件 (John F. Kennedy 1963, Malcolm X 1965, Robert Kennedy & Reverend King 1968), ヴェトナム反戦運動や大学紛争, ヴェトナム敗戦 (1973), ニクソン辞任 (1974) を目撃することになったこの時期は、急激な社会変化の時期であり、また、政府や大企業などによる公式発表の世界と実際との間に大きな食い違いがあることを人々が思い知らされた時期でもあります。歴史の前での個人の無力さが痛感され、また、アメリカ的価値なるものへの信頼が崩れ、価値観の多様化や喪失が起こります。この価値観の多様化と喪失には、テレビメディアの普及とアメリカ社会の一層の大衆社会化、つまり、ポストモダン化、現代思想という点では構造主義からポスト構造主義へという変化などが関係します。このような時代環境の変化を受けて、この時期のアメリカ小説で目立ってくるのは、リアリズムの文学ではユダヤ系作家たちの活躍、ユダヤ系以外のリアリズム作家たちの活躍、黒人文学に起こった変化であり、その一方でリアリズムに立脚しない文学、後に「ポストモダン」小説と呼ばれるようになった文学、すなわち、ブラック・ユーモアの文学とメタフィクションを含むニューフィクションの興隆、そしてリアリズムの一変種でもあり、同時に「ポストモダン」小説の一種とも言えるようなニュージャーナリズムの出現です。

【ユダヤ系の作家たち】ユダヤ系の文学から触れて行きます。語るべき具体的な内容や抱え込んでいる問題意識があり、それらを最も直裁的に分かり

やすい形で処理しようとする時、大抵の場合、作家はリアリズムの手法に訴えます。さて、大戦後、アメリカ社会が中産階級化し、ユダヤ人の受容が大幅に進んだ中で、ユダヤ系の多くの作家達はアメリカ社会の中にあって、ユダヤ人としてのアイデンティティーをいかに保持するかの問題に関わるにせよ、あるいは、ユダヤ人というアウトサイダーの宿命を負いつつもいかにしてアメリカ人としてのアイデンティティーを獲得するかの問題に関わるにせよ、あるいは、ナチスによるホロコーストの問題も含めていわゆるユダヤ体験について語るにせよ、とにかく語るべき彼ら自身の極めてパーソナルな問題を、リアリズムの手法を駆使して語り、彼等の問題を現代の不条理の中でいかに生きるか、という普遍的な問題にまで高め得ました。Saul Bellow, Bernard Malamud (1914-86, *The Magic Barrel*, stories, 1958, NBA, *The Fixer* 1966, NBA), Phillip Roth (1933- , *Goodbye, Columbus*, stories, 1959, NBA, *Sabbath's Theater*, 1994, NBA) などが代表的ですが、彼らについては日本でも良く知られていますので、価値観の多様化と喪失という状況の中で Bellow はあくまで人間性に対して信頼を寄せ、Malamud は夢に向って苦しみもがくことが幸福への道だと説き、Roth はユダヤ人であると同時にアメリカ人であるということはどういうことかという問題、すなわち、複合主体が抱える hybridity の問題を凝視しようとしている、と言うに留めます。すでに触れました Mailer, Salinger, Heller もユダヤ系です。

他のユダヤ系作家としては、『悪い男』(*A Bad Man*, 1967) を書いた Stanley Elkin (1930- ), 『異端の鳥』(*The Painted Bird*, 1965), 『異境』(*Steps*, 1968, NBA) の Jersey Kosinski (1933-91), 歴史小説の Edgar L. Doctorow (1931- , *World's Fair*, 1985, NBA), 実験的な小説を書く Ronald Sukenick (1932- ) と Raymond Federman (1928- ), イディッシュ語で東欧におけるユダヤ体験を書き続け、1978年度にノーベル文学賞を授与された Isaac B. Singer (1904- , *A Crown of Feathers*, 1973, NBA), 女性作家では Cynthia Ozick, (1928- ) などがいます。

[非ユダヤ系のリアリズム作家たち] 非ユダヤ系のリアリズム作家として

は、1960年発表の『走れ、ウサギ』で有名になった John Updike (1932- , *Rabbit, Run*, 1960, *The Centaur*, 1963, NBA, *Rabbit Is Rich*, 1981, NBA), 1969年に発表した『かれら』(*Them*)で全米図書賞を授与された Joyce Carol Oates (1938- ), そして1978年に *On Moral Fiction* と題する本を発表し、その中で彼と同時代の作家のほとんどを、時流を追って形式的実験やブラック・ユーモア的「絶望」の文学ばかりを書くことに終始し、人生についてまじめに「哲学」していないと批判して物議をかもしました John Gardner (1933-82) がいます。Updike は日本でも翻訳を通じてよく知られているので、ここでは Oates と Gardner にだけ軽く触れておきます。

Oates はこれまでに膨大な数の優れた小説や短編を書いており、2001年度の Nobel 文学賞の受賞者候補の一人に選ばれていたほどですが、代表作は初期の頃のこの『かれら』という小説で、この作品は主たる舞台をデトロイトに置いて、1930年代から1967年のデトロイトの暴動に至るまでの間の、貧しい中流下層階級の生活を3代にわたって綴ったものです。Gardner の代表作は1972年発表の『太陽との対話』(*Sunlight Dialogues*) という題の小説で、法と秩序一点張りの警察署長が、逮捕し、逃げられた哲学者めいた言動の浮浪者で、秩序への反抗者、サンライト・マン (実はその地方の名門の義理の息子) と交わした互いに一方通行的な対話を通して感化され、人生への姿勢を改めるのですが、結局は、小説の終わりで、サンライト・マンは撃たれて死ぬという物語です。

【黒人文学の変化】60年代に入って公民権運動が燃え盛ると、黒人文学では、人種差別への抗議の声を申し立てる『マルコム X の自伝』(*The Autobiography of Malcolm X*, 1965) や John A [fred] Williams (1925- ) の *The Man Who Cried I Am* (1967) といった作品が書かれ、また、妻が多胎妊娠で白人と黒人の双生児を産むという皮肉たっぷりな趣向で白人世界の退廃的な性を描いた William Melvin Kelley (1937- ) の『やつら』(*dem*, 1967) などが発表されます。そして、法的には黒人への差別がほぼ撤廃され、「ブラック・イズ・ビューティフル」というスローガンが掲げられ、また、アフロ・

アメリカン宣言（1968）が行われた60年代末になると、黒人小説もこれを反映して、黒人と白人の連帯をテーマとするもの、アメリカ化に反対しアフロ・アメリカ人的価値を主張しようとするものなど、幾つかの傾向を見せるようになります。70年代に入ると、John A. Williams の *Captain Blackman* (1972), Earnest Gaines (1933- ) の『ミス・ジェーン・ピットマン』(*The Autobiography of Miss Jane Pittman*, 1971), Ishmael Reed (1938- ) の『マンボ・ジャンボ』(*Mumbo Jumbo*, 1972), *Flight to Canada* (1976) が書かれます。また、70年代半頃からは、人種差別と性差別という2重の差別下にあった黒人女性達の宿命や歴史を描く黒人女性作家達の活躍が目立ってきます。主な作品としては、1970年発表の Toni Morrison (1931- ) の『青い目が欲しい』(*The Bluest Eye*), 1973年発表の『鳥を連れてきた女』(*Sula*) などがあります。

【モダンからポストモダンへ】小説家の Phillip Roth は、1963年に発表した‘Writing American Fiction’というエッセイの中で、この時代の急激な社会変化と価値観の混乱が生み出す現実の姿は作家の想像力を超えていると嘆き、また、批評家の Frederic Karl は、1960年代にはあまりにも多くの現実がありすぎたが、1970年代にはそれがさらに進んで、現実とはいかなるものなのか、どこにそれはあり、もしあるならそれはどこへ向っているのかを決めることが困難になった時期だと書いています。このカールの言葉は、第二次世界大戦後に始まったアメリカ社会の大衆社会化が更に一段と進み、加えて、科学技術の発達により時代がテレビを中心とするメディアの時代、次いで情報化時代に入り、さらには、パソコンによるインターネットの時代に向かいつつある状況をとらえた言葉と言えます。つまり、現代社会がモダンの(近代)社会から現在われわれがその只中に居るところのポストモダンの社会へと移行しつつあるということを伝えた言葉です。このアメリカ社会のポストモダン化を反映して、この時期のアメリカ小説は幾つかの新しい傾向を生み出しました。この時期までの小説はナチュラリズムの流れをくむ立場、モダニズムの流れを組む立場から書かれて来、そこへ現実描写の姿勢として

はミメーシス（模写）の姿勢により徹するリアリズムが復活して来ていたのですが、アメリカ社会のポストモダン化に伴い、これらの手法や立場では現実を捉えきれないと作家たちが感じるようになったというわけです。この時期まで芸術や文化に対して支配的な影響力を誇ってきた芸術思潮としてのモダニズムは、同じ理由から、この時期以降ポストモダニズムという芸術思潮にとって代わられるようになります。もっともユルゲン・ハーバマスのようにモダニズムははまだ「近代——未完のプロジェクト」として継続していると主張する立場もありましたが。モダニズムとポストモダニズムの違いは参考資料2の通りです。

さて、モダンからポストモダンへという社会変化を反映して、新しいタイプの小説としてブラック・ユーモア、メタフィクションを含めたニューフィクション、そして、ニュージャーナリズムもしくはノンフィクション・ノベルが出現します。これらは、いずれも、変幻極まりなく、意味づけを行うことが不可能とも思える現実をなんとか捉え、いかに恣意的であれ、それになんらかの意味づけを試ようとする努力から生まれてきたものです。ブラック・ユーモアとメタフィクションを含めたニューフィクションは1980年頃からポストモダン小説と呼ばれるようになります。

【ブラック・ユーモア】ブラック・ユーモアと呼ばれる小説は、個人を超えたところで働いているらしい巨大な歴史の力への恐怖から生まれてきており、SF、寓話、ファンタジー、探偵小説、歴史小説などの大衆小説の形式を借り、その方法上の特徴がファビュレーションとかファビュリズムと呼ばれていることから分かりますように（fabulateという言葉は「うその事[こしらえ事]を話す」という意味です）、法外でばかばかしく、まるで信じられないような物語世界を面白おかしく構築します。現実の多様性がもたらす混沌、人間存在の不条理さを前にして、50年代の不条理小説の主人公達はまだ主体的に「実存」することが出来ました。しかし、別名、死刑台のユーモアと呼ばれていることから分かる通り、ブラック・ユーモアの主人公たちは、この主体性すらもはや与えられはしません。彼らに出来ることは、自

らが追い込まれている窮境をユーモアというオブラートに包んで面白おかしく提示し、そこから生じてくる笑いをわずかに支えにして、狂気のような現実の中でからも正気を保とうと試みるのです。したがって、この文学が語るのは、人生をどうすればよいかについてではなく、宇宙的冗談である人生をどう受け入れるかについてであり、この宇宙的冗談を前にしてわれわれが学ぶべき事は、非難したり諦めたりすることではなく、笑う術を学ぶことであると教えるのがその主たる狙いといえるでしょう。

したがって、内容的にこの文学の特徴は 1) 終末論的な世界観 2) 多様な現実を前にして、いかなるものをも額面通りに受け入れることの拒否 3) 世間的な感傷や慣習、明白な矛盾などに向けられた鋭く刺すようなアイロニー 4) 不条理な世界における個人の解放 (release) や社会的和解 (social reconciliation) の可能性の拒否 5) 自我や世界の真正さ (authenticity) 喪失の意識 6) 経験の断片化と多様性の受容 7) 人生に総括的な意味付けを与えることの拒否 8) 人生の戯画化と主人公のアンチ・ヒーロー化などです。主な作家は Joseph Heller, John Barth (1930- ), Thomas Pynchon (1937- ), Kurt Vonnegut (1922- ) などです。

Heller の1961年発表の小説『キャッチ=22』(Catch-22) は、1960年発表の Barth の小説『酔いどれ草の仲買人』(The Sod-Weed Factor) と共にブラック・ユーモア小説の元祖とされている作品です。第二次世界大戦中、地中海のとある島に駐屯するアメリカ陸軍爆撃隊が小説の舞台になっていて、軍規22号に象徴される軍隊機構のご都合主義に抗して、なんとか出撃義務を免れようとする主人公を軸に、てんやわんやの大騒動が描かれます。機構に対する個人の反抗というテーマはこの時期に多く見られた特徴で、Ken Kesey (1935-2001) の傑作『郭公の巣』(One Flew Over the Cuckoo's Nest, 1962) にも見られますが、Kesey の小説の中のインディアンの酋長のように、この小説の主人公も機構からの脱出、つまり軍隊からの脱走を図ります。ただし、スウェーデン目指してゴムボートでというところがいかにもブラック・ユーモアらしいところです。

Barth のブラック・ユーモア小説『酔いどれ草の仲買人』と『やぎ少年ジャイルズ』は、共に、いかにも Barth らしい好色性に満ちた笑劇 (farce) 仕立ての悪漢小説 (picaresque novel) 風教養小説で、前者は17世紀のメリーランドを主舞台に、無垢を信じ、植民地メリーランドの桂冠詩人たらんことを目指す年若い主人公が、ショッキングな現実体験を積み重ねながら人生に対して開眼していく次第が語られます。後者はパロディ尽くしの作品で、宇宙が大学で、両次の世界大戦が第一次、第二次学園紛争、大学の東西両キャンパスが戦後の冷戦構造下の東西両陣営、各カレッジが国という設定の中で、人類の救世主になろうと志した主人公 (キリストになぞらえられています) が、さまざまな試練を通り抜けて悟りを開くのですが、その悟りを他者に伝達することの難しさを厭という程味わわされ、古のキリストと同じように磔刑に処される自分の姿を予見せざるを得ないという物語です。

Pynchon はこれまでに『V.』(V., 1963), 『競売ナンバー49の叫び』(*The Crying of Lot 49*, 1967), 『重力の虹』(*The Gravity's Rainbow*, 1973, NBA), 『ヴァインランド』(*Vineland*, 1990), *Mason & Dixon* (1997) の5作しか発表していません。そして、世間にその姿を現さず、伝記的事実も殆ど知られていません。それにも拘わらず彼は60年代以降のアメリカ小説家の中では最も重要な作家と見なされ、特に第3作の『重力の虹』は、イギリスの作家 James Joyce の『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922) に優るとも劣らないと高く評価されている小説家です。ほとんどの作品で探偵小説的な探求の形態を採っているのが特徴で、『V.』ではその行くところ常に死や戦争があるなどの女の足跡の探求、『競売ナンバー49の叫び』では、実在するか否かが判然としない謎の地下郵便組織トリステロの探求、『重力の虹』では「黒装置」と呼ばれるロケットの極秘部品の探索、『ヴァインランド』では娘による母親探しという形態をとっています。そして、この探求の形態を通して Pynchon は、20世紀の人類の歴史は退廃と衰亡の歴史であり、人類は熱力学の第2法則というエントロピーを増大させながら熱死 (heat death) の状態へと向かっていると警告します。一番の傑作は『重力の虹』だと思いますが、いちば

ん読みやすく、Barth のドタバタ調ブラック・ユーモアに近いのは第1作の『V.』で、この小説は現代の機械文明に疎外され、ヨーヨーのようにあてどなく現代文明の裏通りを行ったりきたりするアンチ・ヒーローのダメ男を主人公とする筋と、偏執狂的に自己の出生の秘密を求めてVの頭文字の付く女の足跡を辿る男を主人公とする筋から成り、悪夢的な20世紀を生きるには両者の生き方のいずれしかないという暗いヴィジョンが示されます。

Vonnegut はS F形式を大胆に採り入れて書き、作家生活の初めの頃はたんなるS F作家と誤解されていたほどです。それも無理からぬことで、彼が最初の頃に書いた11の小説中6篇がS F形式でした。彼がS F形式を多用するのはそれなりに様々な理由が考えられます。しかし、狭い地球の上でいがみ合い、殺し合う人類に宇宙的規模の視野を与え、その空しさを知らしめたい、というのが彼のS F形式多用の最大の理由です。

最高の傑作は彼の6番目の作品『屠殺場5号』(Slaughterhouse-Five, 1969)で、これはヴォネガット自身が捕虜として体験した、アウシュヴィツ、ヒロシマと共に第二次世界大戦中の3大悲劇といわれる、連合軍によるドレスデンの無差別大量爆撃を描いたもので、自由と人道主義のためにファシズムと戦っている筈の味方から受けたこの非人道的な爆撃のショックは大きく、この体験を昇華するのにヴォネガットは20年余の歳月を必要とし、しかも、作品の主人公を時間旅行者に設定するという工夫を凝らさなければなりませんでした。

彼の第4作、『猫のゆりかご』(Cat's Cradle, 1963)はブラック・ユーモアの傑作で、彼の第2作の『タイタンの妖女』(The Sirens of Titan, 1959)と共に『屠殺場5号』に次ぐS F形式の秀作です。人間の視野に欠ける一人の博士が偶然発見したアイス・ナインという物質を、博士同様人間の視野に欠ける3人の子供達に遺したために世界が氷結して滅びるといいう物語です。

S F形式以外では、戦時中連合軍側のスパイとしてナチの高官にまでなった男の悲劇を描いた『母なる夜』(Mother Night, 1961)、博愛的な他者愛に生きようとして精神的に破綻を来す百万長者を描いた『ローズウォーター氏

に神の祝福を』 (*God Bless You, Mr. Rosewater*, 1965), ウォーターゲート事件に連座し、自分を救うために他人を刑務所に追いやるぐらいなら自分が刑務所にはいったほうがまだましだと考えて刑務所に入る男を描いた『ジェイルバード』 (*Jailbird*, 1979) が優れています。『屠殺場5号』の双生児の片割れだとヴォネガット自身が言う、実験的な手法で書かれた第7作の『チャンピオン達の朝食』 (*Breakfast of Champions*, 1973) も、ヴォネガットの人生哲学の到達点を知る上で重要と思われます。

この4人ほどブラック・ユーモア的ではありませんが、Pynchon や Barth の先輩格で、本物と贋ものとの間の区別がつきにくくなった現代のポストモダンの状況を、百科全書的なメガ小説で描き出すというやり方に先鞭をつけた重要なポストモダン作家として1976年度と1994年の二度にわたって全米図書賞を授与されている小説家 William Gaddis (1922-98) の名前と彼の作品の題名、*The Recognition* (1955), *Jr* (1975, NBA), 『カーペンターズ・ゴシック』 (*Carpenter's Gothic*, 1985), *A Frolic of His Own* (1993, NBA) を挙げておきます。

【ニューフィクション (メタフィクション)】ニューフィクションは、小説の死ということが盛んに言われた60年代末頃に現れたもので、小説という形式について自己回帰的 (self-reflexive) な態度を示し、「小説とは何か」とか、「書くという行為」そのものを主題とするメタフィクションをもその中に含みます。ニューフィクションの狙いは行き詰まりの徴候を見せているリアリズムや自然主義の限界を乗り越え、また、モダニズムとして知られている文学的傾向 (確固たる主体の存在を前提にし、意識の流れ、内的独白、心理的深みといった formalism を通して現実を把握しようとする姿勢) に疑問を投げかけることでした。現実というものが意味をなさないばらばらの断片であるという意識を持ち、認識の手段としての言葉自体に対してさえ疑問を投げかけ、作者の主観性を前面に押し出し、小説の持つ虚構性を強調し、小説 (世界) と現実 (世界) との間の関連性を極力否定しようとし、コラージュや pastiche (相容れないものや並び得ないものの並置など) の多用を

通して、言語の不連続性や論理展開の不連続性を提示しようとするのがその特徴と言えます。彼らの作品が示すfabulousな現実の捉え方の新しさの故に、彼等はしばしばブラック・ユーモアの作家達とひっくるめてニューライターズと呼ばれたこともありました。作家としては、Donald Barthelme (1933-89), Richard Brautigan (1935-84), John Barth, Robert Coover (1932- ), William H. Gass (1924- ) などがいます。

Barthelme は、精神性を失ったアメリカの物質文明を「ごみ現象」(trash phenomenon) と呼び、この現象によって現代人がそれと気づかぬ間いかに汚染されているかを、日常生活の些事の中に潜む恐怖という形で描き出すのを得意とします。長編では、童話の『白雪姫』を下敷きにした『白雪姫』(Snow White, 1968) と、死んだ後もなお語り、欲望する巨大な死父(アメリカ?)をその埋葬地へと運ぶ旅(Faulkner, *As I Lay Dying* 1930 のパロディ?)を描いた寓意的な作品『死父』(*The Dead Father*, 1975)があります。前者は現代アメリカにおける真正性(authenticity)の喪失、及び、意味を失った言葉の氾濫を風刺したもの、後者は父性とは何かについて語りながらアメリカ文明を批判したものです。長編の他に Barthelme には数多くの短篇があり、むしろ短篇のほうに彼の本領があると言えるでしょう。「インディアンの反乱」('The Indian Uprising,' *Unspeakable Practices, Unnatural Acts*, 1968), 「都市生活」('City Life,' *City Life*, 1970), 「バルーン」('The Balloon,' *Unspeakable Practices, Unnatural Acts*), 「月がみえるかい」('See the Moon?' *Unspeakable Practices, Unnatural Acts*), 「ガラスの山」('The Glass Mountain,' *City Life*), 「タイヤの国」('A Nation of Wheels,' *Guilty Pleasures*, 1974) などの短編小説は、時事性、寓意性、風刺性、実験性、メタフィクション性に富んだ難解ですが素晴らしい作品です。

東海岸の Barthelme に対するのが西海岸の Richard Brautigan で、Barthelme が知的で機知に富むニュー Yorker 派風であるのに対し、Brautigan は西海岸のヒッピー小説の流れを汲み、感覚的です。代表作は『アメリカの鱒釣り』(*Trout Fishing in America*, 1967) で、これは47のエッ

セイ体の断片から構成され、アメリカ人の荒野への夢が現代では最早失われた夢でしかなくなっていることを幻想小説風に描いています。他にSF風の寓意小説『西瓜糖の日々』(*In Watermelon Sugar*, 1968) などがあります。

メタフィクションの書き手としては、John Barth, Robert Coover, William H. Gass がいます。メタフィクションの方法には、古典など、人びとによく知られた作品を換骨奪胎して再生利用するというやり方もありますが、その中心になるのは、やはり、今しがた触れましたように作者の主観性を前面に押し出し、小説の持つ虚構性を強調し、また、ナチュラルと感じられている言語が持つ人工的な記号性を暴きだすことです。つまり、小説とはあくまで言葉による虚構の構築物であり、小説に描かれている世界は現実そのものではないということを主張することです。小説が一つの虚構でしかないということを利用して自意識的 (self-reflexive) に語る小説が、すなわち、メタフィクションなのです。したがって、メタフィクションでは、「語り」の枠組みの重層化や破壊がよく行われ、認識の伝達の手段としての言語が持つ限界や可能性が吟味され、また、読者とテキストと作者の関係などがその主題となります。たとえば、Barth には7重の枠組みを持つ短篇 ‘Menelaïad’, 4重の枠組みを持つ長編『やぎ少年ジャイルズ』(*Giles Goat-Boy*, 1966) などがあります。いずれも伝達の実態を示し、伝達された内容の信頼性を問題にする、あるいは、それを意図的に吟味する工夫となっています。また、読者とテキストと作者との関係を作品化した短篇 ‘Autobiography: A Self-Recorded Fiction’ や、書くという営為自体をテーマとした ‘A Life-Story’ などがあります。このような性格を持つメタフィクションの神髄は、たぶん、読者を創作の現場に連れ込み、作者と共に作品を創らせる作品ではないかと思われます。この点で、Coover の短編 ‘The Magic Poker’ と ‘The Babysitter’ は、まさしく読者を創作の現場に連れ込み、作者と共に作品を創らせる作品で、彼のメタフィクションの中の最高の傑作、否、すべてのメタフィクションの中の傑作になっています。

‘The Magic Poker’ は、結婚運に恵まれない未婚、既婚の2人の姉妹が、

廃墟となり人が住まなくなっている無人島を訪れ、錆びた火搔棒を見つけてそれを持ち帰るという粗筋の物語を書いていく作者の創作の現場に読者を付き合わせます。作者はこの無人島、2人の姉妹、その他の人物達を読者の目の前で創造していき、2人の姉妹にはさまざまな空想をさせ、作者は作者で、より効果的なテーマの展開を求めて描写や筋の展開を工夫し、推敲していきます。したがって、幾通りかのストーリーのバリエーションが時間の経緯を前後しながら語られる形になり、しかも、バリエーション間に食い違いがあったりします。このため語られている人物がテキスト内に確立されているのかそれともいまだ作者の構想の中のみ存在するのか、あるいは主人公の姉妹の想像の中のみ存在するのか、が判然としなくなってきました。島には結局2人の姉妹しかいないらしいということが分かるのは作品の最後の最後になってからです。このため、この間ずっと読者は、分岐した筋を整理し、作者の意図を推測しながら筋の展開を一本にまとめるという作家的営為を強いられます。つまり、書いては消し、書いては消ししながら書き進む作者に付き合わせられます。そしてその揚句の果に、作品の最後になって島には2人の姉妹しかいないというどんでん返しを食らいます。作品の冒頭で作者が姿を現し、以下で創作を行うことを明示し、以後もたびたび姿を見せて創作談義をしたりするという外枠があるので、これはフィクションの中でのフィクション制作ということになり、この観点からも見事なメタフィクションになっていると言えます。

‘The Babysitter’は‘The Magic Porker’よりもさらにラディカルで、読み進むうちに話が分岐し、前後し、いくつかの筋立ての可能性が提示され、しかも、そのいずれもが‘The Magic Poker’の場合と違って要領を得ません。最後には、そうやって語られてきたことが、実際に起こったことなのかそれともフィクションなのか曖昧にされ、解釈不能の状態に読者は追い込まれます。これらの2篇は他の作家の追随をゆるさない見事なメタフィクションです。長編でメタフィクション的なものとしては『ユニバーサル野球協会』(*The Universal Baseball Association, Inc., J. Henry Waugh, Prop., 1968*)があり

ます。メタフィクション的な作品以外にも彼にはノンフィクション・ノベル的な大作 *The Public Burning* (1977) があり、これら以外にも *The Origin of the Brunists* (1968, 処女作)、探偵小説的な趣向の『ジェラルドのパーティ』(*Gerald's Party*, 1985) といったこれまた興味ある作品があります。

メタフィクションという言葉の生みの親は William H. Gass という大学の哲学の教授でもある小説家で、彼もメタフィクションニストの一人と考えられています。Gass は、小説には叙述 (description) などというものはなくて、あるのは構築 (constructions) だけだと考えます。つまり彼は、小説を、現実の模写としてではなく、言葉が一つの虚構を生み出していくプロセスと見ます。従って、言葉自体についても記号論的な捉え方をします。

代表的な作品は *Willie Master's Lonesome Wife* (1971) で、この作品は主人公である Willie の孤独な妻 Babus がひどく反応のない情夫と愛を交わしている間に彼女の意識を横切る彼女の過去の記憶、言語意識などを3通りに活字体を変えて同時平行的に、加えて、4通りの色分け、紙質の変化、タイポグラフィーの活用、さらに女性のヌード写真を混じえて描いたものです。Willie の妻=言語の図式が成り立つように工夫されていて、彼女と情夫との関係が芸術作品と芸術家、作品と読者の関係に置き換わるようになっており、言語を記号論的に見ない作家達、あるいは、読者達によって彼女が満足をえられないという形で、旧来のリアリズム的言語観、芸術観が批判されています。いろいろな点で非常に実験性に富んでおり、また、その言語観などから、メタフィクションというよりは実験小説と言ったほうがより適切かも知れません。事実、彼は70年代以降の実験小説の先達的な立場にいます。

〔ニュージャーナリズム〕ニュージャーナリズム、もしくは、ノンフィクション・ノベル、はリアリズムを極端にまで押し進めたものとも言えますが、目まぐるしく変化する多様な現実の只中に入り込み、その瞬間、瞬間の変化や鼓動を出来るかぎり作者の主観を排し、零度のエクリチュールで描き、そうすることを通して事件や出来事の現場に読者を臨ませ、より直接的に現実の姿やその背後にある時代意識を伝えようとするものです。したがって、

## 第二次世界大戦以降のアメリカ小説の動向

普通、小説では入り込めないような政治、文化、風俗の現場領域にまで入り込むのが特徴です。ただし、このような性格を持つニュージャーナリズムはある意味では現実への意味づけの拒否でもあると言い得ます。Norman Mailer, Truman Capote, Tom Wolfe (1931- ), Joan Didion (1934- ), Hunter Thompson (1939- ) などがいます。

第3の時期に移ります。

▽1970年代半頃——1980年代末頃まで。

【ミーイズム時代の小説】この時期は、ヴェトナム敗戦、ウォオータゲート事件、そして世界経済におけるアメリカの地位の相対的低下などの出来事が国家や「制度」(System)に対する不信感を生みだし、人びとが人格分析、自己との邂逅、人格再創造、心理解剖などを通して自己を再確認し、自己解放の道を模索しようとするようになった時期、つまり、いわゆる「ミーイズム」が流行した時期です。ジョギングや健康食品ブームが一世を風靡し、ディスコやバンク・ロックが流行し、その反面、『ジョーズ』のようなパニック映画が愛好されます。政治的には60年代の「ニューレフト」に代わってネオコンサーヴァティズム(新保守主義)が台頭してきます。そして、80年代に入ると強いアメリカの再生を主張するレーガン政権の誕生で保守化が更に一段と進み、宗教右派(fundamentalism)が頭をもたげ、日常生活レベルでは、ハイテク・ファッションの最新のブランド品に囲まれた優雅な生活を手に入れようと、ひたすら自分のために働く「ヤッピー(young aspiring [ambitious] professional) [知的職業に就いている若手, ヤップ; 出世志向を持つ40才までくらいの高所得の職業人]」の出現を見る一方で、「レーガノミックス」のために貧富の格差が拡大し、中産階級の没落、貧困層の拡大とホームレスの出現、麻薬禍の拡大と犯罪の多発、離婚の増大など、さまざまな社会的問題が起こってきます。

大義名分ではなく自己自身という原点に立ち帰って自己と社会との関係を見直そうとするミーイズムの姿勢は、小説にも反映され、主観的かつ告白的

に、自己治療的かつ自己愛的に、社会と自己との関係を問い直そうとする人物を主人公とする小説が書かれるようになります。Saul Bellow の *Humboldt's Gift*, 1975, *The Dean's December*, 1982, *More Die of Heartbreak*, 1987 や Philip Roth の *Professor of Desire*, 1977, *The Ghost Writer*, 1980, *Zuckerman Unbound*, 1981, *The Anatomy Lesson*, 1983 などがこれに当たります。

〔少数民族の小説〕他にこの時期の小説で目立つのは、少数民族（マイノリティー）の文学と女性（フェミニズム）の文学の興隆でしょう。公民権運動の挙げた成果を見て、70年代に入ってから、ネイティヴ・アメリカン達の抗議運動が起こり、それにつれてネイティヴ・アメリカンの作家達が注目を集めるようになります。Scott Momaday (1934- ), Gerald Vizenor (1934- ), James Welch (1940- ), Leslie Marmon Silko (1948- ), Louise Erdrich (1954- ) などです。また、これに関連して他の少数民族——ヒスパニック系、アジア系など——の作家達も注目を集めるようになります。中国系の Maxine Hong Kingston (1940- ), 日系の John Okada (1923-71) などです。

（ネイティヴ・アメリカン）Scott Momaday はカイオワ族出身で、現在、大学で教えていますが、彼の代表作はピューリッツァ賞に輝いた *House Made of Dawn* (1968) です。4部構成の短い小説で、第二次世界大戦から帰還した主人公が元の生活に戻れず、殺人を犯し、刑務所出所後ロサンゼルスに出て、インディアン仲間に混じって暮らそうとする。しかし、ここでも西欧文明の世界に馴染めない。だが、祖父の死を看取るために故郷に帰り、祖父から昔から伝わるいろいろなインディアンの伝承を聞かされているうちに、心が癒されるのを感じ、祖父の死、そして葬式後、昔ながらの伝統を守って生活している種族の仲間に加わるという物語です。

Gerald Vizenor には、風刺的で（白人の？）アメリカ社会に対するアイロニーに満ちたポスト・モダン的な作品 *Darkness in Saint Louis Bearheart* (1978) があります。

James Welch はこれまでに、小説としては *Winter in the Blood* (1974), *The*

*Death of Jim Loney* (1979), *Fools Crow* (1986), *The Indian Lawyer* (1990), それにすぐれて文学的な歴史書といえる *Killing Custer: The Battle of the Little Bighorn and the Fate of the Plains Indians* (1994) を発表しています。*Winter in the Blood* の主人公は、白人中心のアメリカ社会から疎外され、そのため、血液の中のどこかに冬が宿っているという感じで、生活に充実感が伴いません。この彼の冷たい空虚な感覚は、一つには彼が子供の頃、兄が事故死した時に感じた罪の意識から、もう一つは、昔、合衆国に敗れた祖先達が、父祖の地を追われ、冬の寒さのさなかに不毛の居留地へと合衆国騎兵隊によって情け容赦なく追い立てられた時の苛酷な寒さへの種族的な記憶から来ています (Trails of Tears)。祖母の死に際して、主人公は、この種族にとって屈辱の冬に騎兵隊の目を逃れて立ち退かず、今は盲目ながらただ一人荒野に毅然として暮らす老インディアンを訪ねます。そしてこの老インディアンからその冬の出来事や雄々しい戦士の種族である彼の種族のインディアンの歴史を聞き、同時にこの老インディアンが彼の祖父であるらしいことを知った主人公は、この老インディアンのような生き方もあるということを悟る、というのがこの作品の筋立てです。

Leslie Marmon Silko は、ラグアナ・プエブロ、メキシコ人、白人、の混血です。彼女の出世作の『儀式／悲しきインディアン』(*Ceremony*, 1977) の主人公も Momaday の場合と同じく復員兵です。彼は、母が遊び半分白人と付き合って生まれた白人とインディアンとの混血で、叔父に引き取られて成長するのですが、一緒に戦争に行き、一緒に日本軍の捕虜となった従兄弟を助けてやれず、死なせたショックで戦争神経症にかかっています。彼の神経症は、同時に、インディアンの世界と白人の世界とによって引き裂かれた自我の産物でもあります。そして、主人公の自我回復への途は Momaday の場合と同様にインディアンの世界への回帰、この作品の場合、伝統的な祈禱師メディスン・マンによる「儀式」と「地母神」的な娘への回帰として示されます。

Louise Erdrich もチパワと白人の混血ですが、彼女もまた、出世作となっ

た処女作『ラブ・メディシン』(*Love Medicine*, 1984)で、白人との間の混血の主人公がアイデンティティを求めて放浪し、結局は、「川を渡って」居留地の世界へと戻る物語を、年代記風に4世代にわたる主人公の家系を再現しながら描いています。若手の作家としては90年代に『リザヴェーション・ブルース』(*Reservation Blues*, 1995)、*Indian Killer*, 1996を發表した Sherman Alexie (1966-) がいます。

(ヒスパニック系アメリカン) スペイン語で書くヒスパニック系の作家達としてはルドルフォ・アナーヤ (Rudolfo A. Anaya, 1937-)、とサンドラ・シスネロス (Sandra Cisneros, 1954-) がいます。アナーヤには、大草原地帯の貧しい家庭で育つ少年と民間療法の女治療師との魂の交流を描いた『ウルティマ、僕に大地の教えを』(*Bless Me, Ultima*, 1972)、ギャング間抗争で背骨を折り、身体麻痺に陥った少年が重度身体障害児病院で奇跡的な回復を遂げるまでを物語った『トルトウーガ』(*Tortuga*, 1979)、シスネロスには、若い女の子の目を通してチカーノたちの暮らしぶりや文化を綴った、短い詩的な掌編からなる『マンゴー通り、ときどきさよなら』(*The House on Mango Street*, 1983) と *Woman Hollering Creek and Other Stories* (1991) があります。英語で書くキューバ系アメリカ人としてはオスカー・イフェロス (Oscar Hijuelos, 1951-) が知られており、彼の映画にもなった『マンボ・キングス愛の歌を奏でる』(*The Mambo Kings Play Songs of Love*, 1989, Pulitzer Prize) は、回想の形で、キューバからの移民兄弟のミュージシャンが1950年代のマンボ大流行の時流に乗って大成功を収め、アメリカン・ドリームを達成するのですが、やがて情け容赦もなく忘れ去られていく次第を物語ります。

(アジア系アメリカン) 他の少数民族の作家では『チャイナタウンの女武者』(*The Woman Warrior*, 1976)で全米批評家賞を獲得した中国系の Maxine Hong Kingston (1940-) が目を引きます。この作品は自伝的な作品で、中国語、中国文化の伝統の中で育った移民2世の女の子が、学齢期になって英語世界という異文化に接触し、アメリカ人になっていかなければならない過

程で味わう苦しみを描いたものです。他に『アメリカの中国人』(*China Men*, 1980), *Tripster Monkey* (1989) があります。他の中国系作家としては『ドナルド・ダックの夢』(*Donald Duck*, 1991), *Gunga Din Highway* (1994) を書き、劇作家としても有名な Frank Chin (1940- ), 『キッチン・ゴッズ・ワイフ』(*The Kitchen God's Wife*, 1991) など知られる Amy Tan (1952- ) などがいます。

日系人の文学の場合には、第二次世界大戦という不幸があったため、アイデンティティの問題はしばしば国家への忠誠の問題となりました。1957年に発表された John Okada (1923-71) の『ノーノー・ボーイ』(*No-No Boy*, 1957/1976) はこの問題を描いた代表的な作品です。戦前のいわゆる写真花嫁世代の移民女性の姿を描いたものに Toshio Mori (1910-80) の *Woman From Hiroshima* (1978) があります。後年、1987年にそのものずばり、『写真花嫁』(*Picture Bride*) という作品が Yoshiko Uchida (1921-92) によって書かれていることを付け加えておきます。Toshio Mori には他に『カリフォルニア州ヨコハマ町』(*Yokohama, California*, 1949), *The Chauvinist* (1979) という優れた短編集があります。もっぱら短篇で日系人たちの生活ぶりを描いた女性作家としてその名を知られている人に *Seventeen Syllables and Other Stories* (1988) を書いた Hisaye Yamamoto (1921- ) があります。

かつてのユダヤ系の文学や黒人の文学の場合と同じように、アメリカの中で独自の文化や伝統を保持している少数民族による文学の場合も、常に自らのアイデンティティーが問題になり、その探求を通して普遍的な人間性のドラマを生み出すと同時に、アメリカ社会による差別に対して抗議の声を挙げているといえるでしょう。もっとも、ユダヤ系文学の場合も、黒人文学の場合も、そしてまた少数民族の文学の場合も、アメリカ社会の中でそれぞれの社会的受容が進むにつれて、彼等の文学の力点も差別への抗議から hybridity の問題、つまり、アイデンティティの問題へと移って来ています。その好例はたとえば Toni Morrison の1998年の小説『バラダイス』や Leslie Marmon Silko の最近作で、1999年発表の *Gardens in the Dunes* にみられます。前者で

は白人に対して偏狭な逆差別をする黒人のコミュニティが批判され、後者では白人とネイティブ・アメリカンとが人間的絆の下で、対等の形で共存する姿が描かれています。

【フェミニスト小説】女性の文学の興隆は、70年代半頃から盛んになったフェミニズム運動、とくに人種と性差という2重の束縛下にあった黒人女性達の性差別に抗議する活発な発言と軌を一にしますが、直接的に女性の自我や女性固有の問題や体験を描く文学を生み出すきっかけとなったのは、多分、1973年に発表されるや騒然たる話題を呼んだErica Jong (1942- )の『飛ぶのが怖い』(*Fear of Flying*)、そしてJudith Rossner (1935- )の『グッドバー氏を探して』(*Looking for Mr. Goodbar*, 1975)やMarilyn French (1929- )の『背く女』(*The Women's Room*, 1978)といった作品でしょう。女性原理、つまり、フェミニズムについての考え方にズレがありはするものの、これらの小説は、女性の視点から今までタブー視されてきた生理など女性固有の問題や体験にも目を向け、女性の体験に対する新しい展望を拓こうとします。このため、女性の文学には形式よりも内容重視の傾向があり、また、自伝的であることが多いようです。主な作家と作品としては今述べました3人の他に、Marge Piercy (1936- , *Small Changes*, 1973, *Woman on the Edge of Time*, 1976), Gail Godwin (1933- , *Perfectionists*, 1970), Joan Didion (1934- , 『マライア』 [*Play It As It Lays*], 1970, 『日々の祈りの書』 [*A Book of Common Prayer*], 1977), Alex Kate Schulman (1932- , *Memoirs of an Ex-Prom Queen*, 1973), Lisa Althur (1944- , *Kinflicks*, 1976), Marianne Hauser (1910- , *The Talking Room*, 1975), Joanna Russ (1937- , *The Female Man*, 1975) などでしょう。黒人の女性作家としては、Toni Morrison (1931- , *The Bluest Eye*, 1970), Alice Walker (1944- , *The Color Purple*, 1982) などがいます。

【自伝体小説と歴史小説】さて、確固たる事実や現実が失われたとき、事実の世界を語ることを前提とする自伝体小説、歴史小説は、作者にとっても読者にとっても魅力的なジャンルとなります。

自伝体小説としては、古くは Benjamin Franklin (1706-90) の『自伝』 (*Autobiography*, 1771-1790執筆, 1818出版), Henry Adams (1838-1918) の *The Education of Henry Adams* (1907) が有名ですし、半世紀ほど時代を遡ると1945年発表の Richard Wright の『ブラック・ボーイ』 (*Black Boy*), そして近くは1964年発表の『Malcolm Xの自伝』があります。この時期のものとしては、百才を超えた元奴隷の黒人女性の生涯にアメリカ百年の歴史を見事に重ね合わせた Ernest Gaines (1933-) の『ミス・ジェーン・ピットマン』 (*The Autobiography of Miss Jane Pittman*, 1971) が有名です。さきほど述べました Kingston の『チャイナタウンの女武者』も自伝体小説です。

本格的な歴史小説の書き手としては E. L. Doctorow がいます。彼の作品『ダニエル書』 (*The Book of Daniel*, 1971) は、ローゼンバーグ夫妻とその2人の遺児をモデルに、原爆スパイとして処刑された夫妻の子ダニエルが、30年代後半の左翼の時代から60年代末の新左翼の時代にいたるまでのアメリカの歴史と生活を背景に、両親の死が持つ社会的、政治的意味を考える物語です。また、『ラグタイム』 (*Ragtime*, 1975) は、移民の大量流入、ライト兄弟の初飛行、T型フォードの量産などの出来事があった今世紀初頭からアメリカの第一次世界大戦参戦 (1917年) 頃までの世相を、黒人の男女、ユダヤ移民の娘、そしてアングロ・サクソン系の一家を登場人物にして浮き彫りにしたものです。1985年発表の *World's Fair* (NBA) は、自伝的な作品で、1939年から40年にかけてニューヨークで開催された世界博覧会の奨励作文コンテストに8才になる主人公の少年 Edgar が入賞するという話をクライマックスに、赤ん坊の頃からの彼の生い立ちが語られ、さらにこれに母親、兄、などが語る章が加わって、一つの時代相を描き出しています。Robert Coover の長大作 *The Public Burning* (1977) は、Doctorow の『ダニエル書』同様に、ローゼンバーグ夫妻処刑を題材にした風刺性の強い作品で、処刑前夜にエセル・ローゼンバーグを大統領ニクソンが誘惑しようとしたり、ニクソンがアンクル・サムに男色される話が出てきます。他に重要な歴史小説としては William Styron の『ナット・ターナーの告白』 (1967, Pulitzer Prize) があり

ます。

【実験小説】 実験小説とメタフィクションとは相似た面がありますが、本質的には異なります。実験小説は手法上の、あるいは、認識上の実験をもつばら試みます。古くは James Joyce, William Faulkner などの意識の流れの手法、Dos Passos のニュース・リールやカメラ・アイの手法などがあります。最近ではタイポグラフィーの活用が目立ちます。たとえば Ronald Sukenick の *The Death of the Novel and Other Stories* (1969) の中の ‘Momentum’ という短篇は、頁を左右のコラムに割り、左側を見出し的に、右側を句読点なしの本文叙述に、‘Roast Beef’ という短篇では「彼」と「彼女」の対話を左右二つのコラムに分け、文字通り対話している形をとります。この手の視覚的実験の最たるものは、Raymond Federman の *Double or Nothing* (1971) でしょう。この作品には、ありとあらゆる活字の利用の仕方が詰め込まれています。実験小説では、活字ばかりか、写真、図形の利用も盛んです。たとえば、Donald Barthelme の短編集『シティ・ライフ』(*City Life*, 1970) の中の ‘At the Tolstoy Museum’ と ‘Brain Damage’, 『罪深き愉しみ』(*Guilty Pleasures*, 1974) の中の ‘The Expedition’ と ‘A Nation of Wheels’ がその好例でしょう。語りの手法では、コラージュや pastiche の多用、Barthelme の短篇 ‘Sentence’ がそうですが、ワン・センテンスが延々数頁続く、文字どおりセンテンスを意識させる工夫、同じく Barthelme が短篇 ‘The Glass Mountain’ で行っているのですが、箇条書きで一つの物語を綴る工夫、あるいは、Walter Abish (1931- ) の *Alphabetical Africa* (1974) のように、第1章で用いられる単語は全て a で始まり、第2章では a と b で始まり、第3章では a と b と c で始まり、という風にしてアルファベット26文字を z まで進み、次いで今度は逆に、語頭に来るアルファベット文字が z, y, x と減っていき、最終章は再び a で始まる単語のみが用いられるという方法でアフリカを舞台とする物語を語るという、極めて斬新かつ実験的な試みもあります。また、Jorge Luis Borges (1899-1986) の作品や Vladimir Vladimirovitch Nabokov (1899-1977) の『青白い炎』(*Pale Fire*, 1962) などの影響があつてか、

William H. Gass の *Willie Master's Lonesome Wife* の一部に見られるように、注釈から成るようなテキストや、John Barth の短編にみられるのですが、チャイニーズ・ボックス的工夫への試み、も見受けられます。認識論的実験としては、Sukenick の *Up* (1968) のように、作家主人公が創作した作中人物が、作家主人公の実際の生活の中に登場するという、人生虚構論的な作品も書かれています。他の主な作家としては、*Mulligan Stew* (1979) を書いた Gilbert Sorrentino (1929- )、*Reflex and Bone Structure* (1975) を書いた黒人作家 Clarence Major (1936- ) などがいます。

【新しいリアリズムの誕生の動き】80年代における新しい動きは、新しいリアリズム誕生の動きと、それに関連したミニマリズムの出現でしょう。新しいリアリズム誕生の動きは、70年代後半あたりから始まります。(従来のリアリズムとは異なり、社会を写し取る、あるいは現実を定義するというよりは、現実を客観的に提示するという方法を用いて、非常に主観的な世界像を語る、新しいタイプのリアリズムです。アメリカの保守化、ミーイズムの流行などが生み出した傾向とも言えますが、メタフィクション、ファビュリズムの時代をすでに経ているため、どうしても世界や小説そのものについて自意識的な傾向があります。John Irving (1942- ) の1978年発表の小説『ガープの世界』(*The World According to Garp*) がその代表的な例で、この小説に登場する小説家主人公 Garp がこの作品中で書く作品についての言及などにメタフィクション的要素が見て取れます。アーヴィングはこの作品の後、『ホテル・ニューハンプシャー』(*The Hotel New Hampshire*, 1981)、*The Cider House Rules* (1985)、*A Prayer for Owen Meany* (1988) など多くの作品を書き、日本でもかなりの数の作品が翻訳され、読まれている作家ですが、その人気の秘密は、*NYTBR* で1998年発表の作品である *A Widow for One Year* について書評子の William H. Prichard が指摘しているように、アーヴィングが19世紀のイギリスの小説家ディケンズをお気に入りの作家としており、ディケンズ同様に、sentimentality に陥ることを恐れずに、物語を語るということを重視しているところにあると言えるでしょう。アーヴィング以外で重要な作

家としては、[この作品は fabulation の気配を濃厚に秘めています]『カチアートを追跡して』(*Going After Cacciato*, 1978, NBA) や『ニュークリア・エイジ』(*The Nuclear Age*, 1986), 『本当の戦争の話をしよう』(*Things They Carried*, 1990) を書いた Tim O'Brien (1946-) がいます。旧来のリアリズムで書いている作家としては、『黄昏に燃えて』(*Ironweed*, 1983, Pulitzer Prize) など、ニューヨーク州オールバニーを舞台とする小説を書いている William Kennedy (1928-) , *A Piece of my Heart* (1976), *The Sports Writer* (1986), *Independence Day* (1995, Pulitzer Prize), 短編集 *Rock Springs* (1987) などその名を知られる Richard Ford (1944-) などがいます。

【ミニマリズム】 こういったリアリズム復活の気運とともに、80年代前半に入ると、現実と夢とが錯綜したような摩訶不思議な現実性を秘めた雰囲気を持ち、物語性に富んでいるため magic realism と呼ばれたラテン・アメリカ小説の大ブーム (たとえば, Gabriel Garcia Marquez [Nobel Prize in 1982] の『百年の孤独』など) が一般の読書界に起こりました。そして、これに刺戟されたかのように、ミニマリズムと呼ばれるアメリカ短篇小説の大ブームが起こります。これは、アメリカ社会のライフスタイルの変化 (大義名分の拒否とミーイズム) に合わせて若い世代の作家達の間には、実験性そのものを目指してテキスト内に閉じこもるよりも、テキストの外の周囲にある日常性の世界に目を向けようとする動きが出てきたためと思われます。もっとも、その日常性の世界は、言葉や映像による情報が横溢し、死と暴力とセックスとコマーシャルイズムがはびこる、常に変転きわまりなく、現実の所在不明の世界ではあります。

ミニマリズムは、先ほど述べました80年代に入ってから始まった新しいタイプのリアリズムに立脚しますが、極端に人物、場所、時間などを狭く限り、ごく身近な日常性の世界を題材とする傾向に対して与えられた呼び名です。John Barth の言葉を借りれば、この傾向は、「短い単語、短い文章とパラグラフ、超ミニ短篇、8分の3インチしか厚みのないミニ長編、修飾語を省いた語彙、簡潔な構造、感情を削ぎ落とした文体、極小の人物、道具立て、筋

の運び」をその特徴とします。また、現在時制や2人称を活用します。同じ日常性の世界をパロディと鋭いアイロニーを武器にして、その中に外の世界の脅威を鋭く、知性的かつ硬質の文体で描き出した Donald Barthelme の世代の短篇とは違って、受動的で、歴史からの意図的撤退を感じさせる傾向です。この傾向が体制是認なのか拒否なのかはさておき、読者層がテレビ世代へと移ってきたこと（読書力、作文力の低下と読書量の減少）や、現代のコマーシャルリズムの影響、そしてライフスタイルの変化（ミーイズムによるミニマル・セルフ志向／誇大なもの、過大なものへの不信）などがこの現象を生み出す要因の一つになっていると思われます。このような傾向を示す minimalism に対しては ‘Less Is Less’ であると捉えて批判する John Barth や Madison Stuart Bell や Cynthia Ozick といった小説家が一方にいますが、他方では、‘Less Is More’ と捉えて、minimalism をブラック・ユーモアやニューフィクションが high modernism だとすれば、minimalism は low modernism と言い得るものだと評価する見解もあります。主な作家としては短篇集『大聖堂』(Cathedral, 1983) と『ぼくが電話をかけているところ』(Where I'm Calling From, 1989) の Raymond Carver (1938-88), 短編集『ボビー・アン・メイソン短編集』(Shiloh and Other Stories, 1982) と『ラブ・ライフ』(Love Life, stories, 1989), 小説 In Country (1985) の Bobbie Ann Mason (1940- ), 短編集 Distortions (1976), Secrets and Surprises (1978), 『燃える家』(The Burning House, 1983), 『あなたが私を見つける所』(Where You'll Find Me, 1986), 小説 Chilly Scenes of Winter (1976), 『愛している』(Love Always, 1985) などその名を知られる Ann Beattie (1947- ), Donald Barthelme の弟で短編集『ムーン・デラックス』(Moon Deluxe, 1983) で一躍有名になった都会派短篇の名手 Frederick Barthelme (1943- ) [他に短編集 Tracer, 1985, Chroma, 1988, 小説 Second Marriage, 1984, Natural Selection, 1990], 短編集『ブラック・チケット』(Black Tickets, stories, 1979), 『ファースト・レーンズ』(Fast Lanes, stories, 1987), 小説 Machine Dreams (1984) の Jayne Anne Phillips (1952- ), In the Garden of the North

*American Martyrs* (stories, 1981), *Back in the World* (stories, 1985), 『兵舎泥棒』(*Barrack's Thief*, 1985) の Tobias Wolff (1945- ) がいます。

「あらかじめ失われた世代」「MTV 世代」の登場」続いて、1980年代半頃になると、リアリズムに立脚する彼らより若い世代の作家達、「1960年代にヒッピーになるには遅く生まれ過ぎ、1980年代のコンピューターの時代には早く生まれ過ぎた」(David Leavitt) 50年代、60年代生まれの作家達が出てきます。「あらかじめ失われた世代 (New Lost Generation)」, “MTV Generation” と呼ばれる世代です。彼等は、あらゆるものを「商品化」する後期資本主義の消費主義やメディアに躍らされ、無関心化し頹廢して行くアメリカ人やアメリカ社会の姿をひたすらあるがままに描いていきます。したがって、彼らの小説では、ブランドネームが溢れ、ショッピング・モールが生活の主要な舞台を形成し、MTV やマリファナ、ヴァイオレンス、セックスが支配的な要素になっています。このため、彼等の小説は ‘bratpack’ と呼ばれたりしています。Jay McInerney (1955- ) の1984年発表の小説『ブライト・ライツ、ビッグ・シティ』(*Bright Lights, Big City*), Bret Easton Ellis (1964- ) の1985年の小説『レス・ザン・ゼロ』(*Less Than Zero*), 『ルールズ・オブ・アトラクション』(*Rules of Attraction*, 1987) などがその代表例で、テレビ、電話、ファックス、VTR や CD, MTV に取り囲まれて育ち、暮らし、ブランドものの衣服やトレンドイなレストランやディスコ・バー、ヘルス・クラブを追い求め、自分の利益や快樂以外にはひたすら無関心、無感動な1980年代の若者やヤッピーたちの生態が見事に描き出されています。ややシリアスな作品を書き、MTV 世代に対して批判的な距離を置いているのが 短編集『ゼロ・デシベル他』(*Zero db*, 1987), *Barking Man*, 1990, 小説 *The Washington Square Ensemble*, 1983, *Waiting for the End of the World*, 1985, *Soldier's Joy*, 1989 を書いている Madison Smart Bell (1957- ) と短編集『ファミリー・ダンシング』(*Family Dancing*, 1984) などで知られる David Leavitt (1961- ) です。これらのリアリズム系の若い世代の作家達に対して、その他としては、slipstream かつアヴァン・ポップで、実験小説的

な傾向を示し、*I Smell Ester Water*, 1984, *My Cousin, My Gastroenterologist*, 1989 を書いている Mark Leyner (1956- ), 「サイバー・パンク」SFの William Gibson (1948- ), 「パンク」小説の Kathey Acker (1948- ) などがいます。

〔ポストモダン小説の第2世代, 第3世代〕新しいリアリズム誕生の流れの一方で、「ポストモダン」小説が、その第2世代と呼ばれた作家達 Don DeLillo (1936- , 『ホワイト・ノイズ』*White Noise*, 1984, NBA, 『リブラ・時の秤』*Libra*, 1988) や Paul Auster (1947- , *The Invention of Solitude*, 1982, *The New York Trilogy* 1987 [*The City of Glass*, 1985, *Ghosts*, 1986, *The Locked Room*, 1986], *In The Country of Last Things*, 1987, *Moon Palace*, 1989, *The Music of Chance*, 1990) などによって書き継がれています。さらに「ポストモダン」小説を書く若い世代の作家たち、「ポストモダン」小説の第3世代が現れて来ます。南米のマジック・リアリズムを思わせるような作品『彷徨の日々』(*Days Between Stations*, 1985), 『ルビコン・ビーチ』(*Rubicon Beach*, 1986), 『黒い時計の旅』(*Tours of the Black Clock*, 1989) を書いた Steve Erickson (1950- ), 数学や生物学, コンピューター・サイエンスの知識などを生かしながらピンチョン流のメガ小説 *You Bright and Risen Angels: A Cartoon* (1987), *The Rainbow Stories* (short stories, 1989), *The Ice-Shirt* (1990) を書いた William T. Vollmann (1959- ), 小説『ウイトゲンシュタインの箒』(*The Broom of the System*, 1987), 短編集『奇妙な髪の少女』(*Girl with Curious Hair*, short stories, 1989) を書いた David Foster Wallace (1962- ), 『舞踏会に向う三人の農夫』(*Three Farmers on Their Way to a Dance*, 1985) や *Prisoner's Dilemma* (1988) を書いた Richard Powers (1957- ) といった作家達です。

第4の時期について。

▽1990年代から現在まで。

この時期は政治的にも文化的にもわれわれの現実体験の範囲内に入る身近

な時期であり、評価のいまだ定まらない事柄なども数多くあるので、簡単な見取り図を示すに留めます。

【グローバル化時代の到来とアメリカの再生】この時代は東西冷戦の終結とそれに伴うグローバル化時代の幕開け、国内的には貧富の格差の一層の拡大（2006.1.9.Mon.の朝日新聞の記事によると、米国のトップ企業367社の経営者が得る報酬平均を労働者平均と比べた調査では、82年に42対1だったのが、90年には107対1、04年には431対1）と、大量の移民の受け入れによる人口構成の大規模な変化の時代です（1980年代の10年間で合法移民900万、非合法移民200万。さらに、1990年から1997年の間に外国生まれの合法移民750万が合衆国に入国）。これに「情報ハイウェイ」政策による更なる情報化の進展が加わります。他方で、アメリカ社会の保守化の方も一層進みリベタリアニズムなどが出てきます。冷戦の解消によるグローバル化は、冷戦を基軸に構築されてきた従来の価値観の転換を、そして、新しい価値観の模索を促し、人口構成の変化や貧富の格差の増大や「情報ハイウェイ」政策や科学技術の進歩（クローン羊の誕生や遺伝子組み換えなど）がもたらす社会変化も同様に新しい価値観への模索を促します。こうしてポスト構造主義思想によって主体性をあやふやにされ、また、科学技術の進歩とメディアの発達、インターネットの普及などによって、カテゴリー間の区分が曖昧化し、真正性が失われたかに見える社会の中で、人びとは新しい価値観、新しい倫理的基盤を求めるようになります。そしてこれが文学や文学批評、現代思想にも反映されることとなります。

ソシュールの言語学を出発点にして1950～1960年代にかけて構造主義が流行し、1970年代～1980年代にかけてはポスト構造主義が現代思想の主流となってきたことは周知の事実であり、ポスト構造主義では構造主義と違って、表層の下に潜む共通の基盤は失われ、つまり、中心あるいは普遍は失われ、ロゴス中心主義（つまり、近代以降の西欧中心主義の）は否定（deconstruct）されます。そして、この脱中心化は人間主体にもおよび、カント的な自律的かつ理性的な人間主体はいまや言語という差異の体系の中のさまざま

まな言説へと解体され、ア priori にその存在を保証されていた人間主体は「構成された精神分析的主体」「デリダ、フーコー、ジャン＝フランソワ・リオタールの痕跡的あるいは主語位置 (subject position) 的な主体」とみなされます。この脱中心化という志向性を持ったポスト構造主義は、人種や性別や性同一性障害などによる差別などといった政治的・社会的不正義や不正の解消への理論的根拠付けを行うものとして大いに貢献してきました。文学の世界でも70年代以降に脱構築批評が盛んとなり、文学史の書き換え (Canon の deconstruction) が行われ、Feminist Criticism, ホモ・レズビアン Criticism, Queer Studies あるいは New Historicism や Postcolonial Studies といった新しい批評を生み出しています。また、芸術の世界では modernism から postmodernism へという変化を生み出しました。両者の相違は先ほどの参考資料2の通りですが、これをさらに簡略化して言えば、modernism は神なき後の現実の無秩序や不合理に背を向けて抽象的でたぐい稀な芸術の世界に「理性、安定、調和」の最後のより処を求め、芸術を通して現実を肯定的に受け止めようとする姿勢で、従って、low culture ではなく high culture を目指し、唯我的でエリート主義的傾向を見せ、人間もその主体性をまだ失ってはならず、失われた神にかわる人間存在の基盤 (foundation) を探す人となります。これに対して postmodernism は、政治・社会・経済・文化的変化に伴うシステムの見直しの中から生まれてきたのだという点では modernism と同じです。しかし、modernism との違いは啓蒙主義以来の理性 (ロゴス) 中心主義からの脱却、すなわち、「大きな物語 (grand narrative)」の否定と主体中心的な考え方からの脱却でしょう。

postmodernism は1950年代のアメリカ社会の大衆社会化を踏まえて起こった芸術、そして時代思潮の一大パラダイム転換であり、また、これとはやや遅れて始まったポスト構造主義は、この postmodernism という芸術、そして時代思潮を理論的に支えてきた思想だったわけです。しかし、これら二つの思想は1980年代末頃になり、人種差別や性差別などの問題に一応の是正がもたらされると、そのラディカルさが問題視されるようになります。そして、

そのラディカルさがもたらした中心の喪失、人間主体の解体を、そしてまた、シュミレーションやシミュラクラの跳梁による真正性の喪失の中で、さらにまた、決定不可能性の中で、これまで抑圧に近い状態にあった、人はどう生きたらよいのかという問い掛けの聲が息を吹き返してきます。脱中心化と人間解体の思潮の中で長年沈黙を強いられてきた倫理学の方面からばかりでなく、ポスト構造主義者の中からも主体の問題をあらためて取り上げる聲が挙がっています。(『主体の後に誰が来るのか?』) こういった思想界の動きは、いずれもアメリカ社会の一層の保守化の結果だと思われます。主体性の回復や失われた中心に代わるものの模索は、1990年代以降のアメリカ小説ではどのように探究されているのでしょうか。

第2世代の「ポストモダン」作家達、1980年代に台頭してきた第3世代の若手の「ポストモダン」作家たちも、新しく興って来たリアリズムの作家達も、ともにこの問題に関わり合っています。「ポストモダン」作家の第2世代、第3世代、そして90年代以降の新しいリアリズム小説家達は、いずれも小説の持つ物語性を回復させながら自己回復のテーマをより社会的現実に着目した形で展開することを通して、人間の主体性の問題に取り組んでいます。リアリズム小説の場合、その多くは、故郷や自然への帰還というテーマを展開し、地域や自然へのこだわりを通して失われた自己や主体性を回復し得る可能性を示唆しているようです。どのような「ポストモダン」作家、「リアリズム」作家がおり、どのような作品があるかは、参考資料1に挙げてあるのでご覧ください。ここに名前を挙げた「ポストモダン」小説とリアリズム小説はいずれも高い評価を得ている作品ばかりです。ぜひご自分でお読みになって、人間の主体性について、それらが語るところを読み取ってみてください。グローバル化時代の今日、異文化への理解や和解ということがきわめて重要な問題となっていますが、アメリカという国はもともとが多民族国家でもあるので、異文化の共存や複合主体の問題がこれまで常に文学、とくに小説の分野において、そのテーマや題材の重要な一部となってきました。したがって、今後のアメリカ小説が複合主体 (hybridity) の問題も含めて主体の

## 第二次世界大戦以降のアメリカ小説の動向

問題や普遍の問題について、われわれにどのような示唆を与えてくれるのか、大いに期待が持たれる次第です。

(2006. 1. 19)

### 参 考 資 料

#### 参考資料 1

##### 第二次世界大戦後のアメリカ小説と時代背景：概観

#### ◇1945——1960年頃まで

時代背景（パックス・アメリカナ時代の到来／東西冷戦→the age of anxiety→閉ざされた50年代，順応の時代 [the age of conformity]→the Silent Generation→the Era of the Gray Flannel Suit）

- ①国際情勢：東西冷戦による戦後世界の二極構造化→資本主義と共産主義の対立→米ソの軍拡競争→ソ連封じ込め戦略（トルーマン・ドクトリン）；政府職員  
の忠誠テスト→ハリウッドの赤狩り（1947）；中国の共産主義化（毛沢東の中国  
成立）（1949）；朝鮮戦争（1950-53）→マッカーシー旋風（1950）；アイゼン  
ハワーの「巻き返し戦略」，ソ連水爆実験成功（1953）；スプートニック・シ  
ョック→核の恐怖の時代→二つの文化論争（1957）
- ②国内情勢：戦後のアメリカ経済の未曾有の好景気→アメリカの世紀→大量生産，  
大量消費の高度管理型産業主義社会，いわゆる大衆社会の出現（一般大衆の中  
産階級化）→デヴィッド・リースマンの『孤独な群衆』（1950）[他人指向型で  
大量消費，郊外型生活志向というライフスタイルの出現]→アラバマ大学に最  
初の黒人学生入学（1956）
- ③文化：家電時代の幕開け→余暇時代の幕開け→映画とブロードウェイ・ミュー  
ジカルの全盛時代→『南太平洋』（1949），『マイ・フェア・レイディ』（1956），  
『サウンド・オブ・ミュージック』（1959）；エルヴィス・プレスリー旋風，営  
業用カラーテレビ放送開始（1951）；第1回ニュー・ポート・ジャズ・フェス  
ティヴァル（1954）

アメリカ小説：

- ①戦争小説 Norman Mailer（1923- ）『裸者と死者』（*The Naked and the Dead*,  
1948）；James Jones（1921-77）『ここより永遠に』（*From Here to Eternity*, 1951,  
NBA）；Herman Wouk（191- ）*The Caine Mutiny*（1951, Pulitzer Prize）

- ②南部小説 Eudora Welty (1909-2001) 『デルタの結婚式』 (*The Delta Wedding*, 1946), *The Optimist's Daughter* (1972, Pulitzer Prize); Carson McCullers (1917-67); Flannery O'Connor (1925-64) 『賢い血』 (*The Wise Blood*, 1952), *The Complete Stories* (1971, NBA); Truman Capote (1924-84) 『遠い声, 遠い部屋』 (*Other Voices, Other Rooms*, 1948), 『ティファニーで朝食を』 (*Breakfast at Tiffany's*, 1958); Walker Percy (1916-1990) *The Moviegoer* (1961, NBA)
- ③黒人小説 Richard Wright (1908-60) 『アウトサイダー』 (*The Outsider*, 1953); Ralph Ellison (1914-94) 『見えない人間』 (*Invisible Man*, 1952, NBA); James Baldwin (1924-84) 『もう一つの国』 (*Another Country*, 1962)
- ④戦後世代の作家達 Norman Mailer 『バーバリの岸辺』 (*Barbary Shore*, 1951), 『鹿の園』 (*The Deer Park*, 1955); Jerome D. Salinger (1919- ) 『ライ麦畑でつかまえて』 (*The Catcher in the Rye*, 1951)
- ⑤不条理小説
- 1) 不条理の発見とその受諾 (その理由なき犠牲者) Saul Bellow (1915-2005) 『犠牲者』 (*The Victim*, 1947); William Styron (1925- ) 『闇の中に横たわりて』 (*Lie Down in Darkness*, 1951); Ralph Ellison 『見えない人間』 (1952, NBA); Walker Percy *The Moviegoer* (1961, NBA); John Barth (1930- ) 『フローティング・オペラ号』 (*The Floating Opera*, 1956), 『旅路の果て』 (*The End of the Road*, 1958); James Purdy (1923- ) 『マルコムの変遷』 (*Malcolm*, 1959)
  - 2) 不条理への反抗からそれへの妥協 Saul Bellow 『オーギー・マーチの冒険』 (*The Adventures of Augie March*, 1953, NBA), 『雨の王ヘンダーソン』 (*Henderson the Rain King*, 1959); John Updike (1932- ) 『走れ, ウサギ』 (*Rabbit, Run*, 1960)
  - 3) 実存的に生き抜くことを通しての不条理への反抗 Richard Wright 『アウトサイダー』 (1953); Jerome D. Salinger 『ライ麦畑でつかまえて』; Joseph Heller (1923-99) 『キャッチ=22』 (*Catch-22*, 1961)
- ⑥ビート世代の小説 Jack Kerouac (1922-68) 『路上』 (*On the Road*, 1957); William Burroughs (1914-97) 『裸のランチ』 (*The Naked Lunch*, 1959)

◇1960年頃——1970年代半頃まで

時代背景 (開かれた60年代 ["New Frontier," "the Greening of America"], 若者革命の60年代 ["the Free Speech Movement"; "sit-in" "be-in" "teach-in"/ Counter Culture; "Flower Children" "Pepsi Generation" "Woodstock Genera-

## 第二次世界大戦以降のアメリカ小説の動向

tion”], 不確かさの70年代 [the Age of Ambivalence, the Age of Second Thought])

- ①国際情勢：東独，東西ベルリンの出入りを封鎖し，ベルリンの壁構築→キューバのミサイル危機（1961）；トンキン湾事件（米政府の捏造事件）（1964）；北ベトナム爆撃開始（1965）；中国の文化大革命（1966）；中東戦争，アラブ連合敗北（1967）；ベトナム和平公式会談バリで始まる→ソ連軍チェコ侵入（プラハの春）→世界各地で大学紛争→フランスで5月革命（1968）；アポロ11月面着陸（1969）；米軍，カンボジアに介入（1970）；第4次中東戦争→石油危機（1973）；ベトナム戦争終結 [戦死者4万7千，負傷者30万，ベトナム帰還兵総数655万8千]→米ソ宇宙船ドッキングに成功（1975）
- ②国内情勢：ケネディの登場とニューフロンティア精神（1961）；アメリカの若返り（the Greening of America）の時代→Mississippi 大学への黒人学生の入学をめぐる暴動発生，連邦軍派遣，州知事は憲法違反とされる→レーチェル・カーソン『沈黙の春』，マイケル・ハーリントン『もう一つのアメリカ』（1962）；「ワシントン大行進」とキング牧師の「わたしには夢がある……」演説→ケネディ暗殺，ジョンソン大統領に→ベティ・フリーダン『女らしさの神話』→ヒッピー運動しだいに活発化（1963）；Black Muslim の指導者 Malcolm X 暗殺→ラルフ・ネイダー消費者運動を開始→ワシントンで1.5-2.5万人規模のベトナム反戦集会（1965）；性表現の自由化→全国婦人機構（NOW）結成（1966）；全米各都市で黒人暴動発生→ワシントンで大規模なベトナム反戦集会→affirmative action 採択（1967）；キング牧師暗殺→各地で黒人暴動発生→ロバート・ケネディ暗殺→コロンビア大で大学紛争始まる（1968）；ニクソン大統領就任→ワシントンで25万人参加のベトナム反戦大集会（1969）；ケント州立大事件→全米各地で公害反対，環境保護の“Earth Day”集会とデモ→米各地でウーマンリヴ組織結成と大行進（1970）；ワシントンで32万人規模のベトナム反戦大集会（1971）；American Indian Movement の代表500人がIndian 局を占拠（1972）；ウォーターゲート事件始まる（1973）；ニクソン辞任，フォード大統領に（1974）
- ③文化：IC回路を使った第3世代コンピューター登場→東京オリンピック（1964）；全世界にミニスカート大流行（1965）；ジョギングの流行（1967）；ポルノ解禁（1970）；健康食ブーム→satellite TV cable（1975）

アメリカ小説：

- ①ユダヤ系の作家達 Saul Bellow 『ハーツォグ』 (*Herzog*, 1964, NBA), 『サムラ

ー氏の惑星』 (*Mr. Sammler's Planet*, 1970, NBA), 『フンボルトの贈物』 (*Humbolt's Gift*, 1975, Pulitzer Prize); Bernard Malamud (1914-86) 『アシスタント』 (*The Assistant*, 1957), 『魔法の樽』 (*The Magic Barrel and Other Stories*, 1958, NBA), 『修理屋』 (*The Fixer*, 1966, NBA/Pulitzer Prize); Philip Roth (1933- ) 『さようなら, コロンバス』 (*Goodbye, Columbus*, 1959, NBA), 『ポートノイの不满』 (*Portonoy's Complaint*, 1969), 『男としての我が人生』 (*My Life as a Man*, 1974), 『背信の日々』 (*The Counterlife*, 1987), *Sabbath's Theater* (1994, NBA), *American Pastoral* (1997, Pulitzer Prize); Norman Mailer 『アメリカの夢』 (*The American Dream*, 1965), 『死刑執行人の唄』 (*The Executioner's Song*, 1979, Pulitzer Prize); Stanley Elkin (1930- ) 『悪い男』 (*A Bad Man*, 1967); Jersey Kosinski (1933-91), 『異端の鳥』 (*The Painted Bird*, 1965), 『異境』 (*Steps*, 1968, NBA); Edgar L. Doctorow (1931- ); Ronald Sukenick (1932- ); Raymond Federman (1928- ); Isaac Bachevis Singer (1904- ) *A Crown of Feathers* (1973, NBA); Cynthia Ozick (1928- )

②リアリスト達 John Updike 『走れ, ウサギ』 (1960), 『ケンタウロス』 (*Centaur*, 1964, NBA), 『金持ちになったウサギ』 (*Rabbit Is Rich*, 1971, NBA/Pulitzer Prize); Joyce Carol Oates (1938- ) 『かれら』 (*Them*, 1969, NBA), *Bellefleur* (1980); John Gardner (1933-82) *Grendel* (1971), 『太陽との対話』 (*The Sunlight Dialogues*, 1972)

③黒人文学の変化 Malcolm X (1925-65) 『マルコム X の自伝』 (*The Autobiography of Malcolm X*, 1965); John A [Ilfred] Williams (1925- ) *The Man Who Cried I am* (1967), *Captain Blackman* (1972); William Melvin Kelley (1937- ) 『やつら』 (*dem*, 1967); Earnest Gaines (1933- ) 『ミス・ジェーン・ピットマン』 (*The Autobiography of Miss Jane Pittman*, 1971); Ishmael Reed (1938- ) 『マンボ・ジャンボ』 (*Mumbo Jumbo*, 1972), *Flight to Canada* (1976); Toni Morrison (1931- ) 『青い目が欲しい』 (*The Bluest Eye*, 1970), 『鳥を連れてきた女』 (*Sula*, 1973)

モダンからポストモダンへ

④ブラック・ヒューモアの作家達 (=ファビュレーション, ファビュリズムの作家達)

特徴: (1) 終末論的な世界観 (2) 多様な現実を前にして, いかなるものをも顔面通りに受け入れることの拒否 (3) 世間的な感傷や慣習, 明白な矛盾などに向けた鋭く刺すようなアイロニー (4) 不条理な世界における個人の解放

## 第二次世界大戦以降のアメリカ小説の動向

(release) や社会的和解 (social reconciliation) の可能性の拒否 (5) 自我や世界の真正さ (authenticity) 喪失の意識 (6) 経験の断片化と多様性の受容 (7) 人生に総括的な意味付けを与えることの拒否 (8) 人生の戯画化と主人公のアンチ・ヒーロー化

Joseph Heller 『キャッチ=22』 (1961) ; John Barth 『酔いどれ草の仲買人』 (*The Sod-Weed Factors*, 1960), 『山羊少年ジャイルズ』 (*Giles Goat-Boy*, 1966), 『レターズ』 (*Letters*, 1979), 『サバティカル』 (*Sabbatical*, 1982) ; Thomas Pynchon (1937- ) 『V.』 (*V.*, 1963), 『競売ナンバー49の叫び』 (*The Crying of Lot 49*, 1966), 『重力の虹』 (*Gravity's Rainbow*, 1973, NBA) ; Kurt Vonnegut (1922- ) 『猫のゆりかご』 (*Cat's Cradle*, 1963), 『屠殺場5号』 (*Slaughterhouse-Five*, 1969) ; William Gaddis (1922-98) *The Recognition* (1955), *Jr.* (1975, NBA), 『カーペンターズ・ゴシック』 (*Carpenter's Gothic*, 1985), *A Frolic of His Own* (1994, NBA)

### ⑤ニューフィクション (メタフィクション) の書き手達

特徴：(1) 作者の主観性の強調 (2) 小説の持つ虚構性の前景化 (3) 記号としての言語観など

Donald Barthelme (1933-89) 『雪白姫』 (*Snow White*, 1967), 『都市生活』 (*City Life*, stories, 1970), 『罪深き愉しみ』 (*Guilty Pleasure*, stories, 1974), 『死父』 (*The Dead Father*, 1975) ; Richard Brautigan (1935-84) 『アメリカの鱒釣り』 (*Trout Fishing in America*, 1967), 『西瓜糖の日々』 (*In Watermelon Sugar*, 1968) ; John Barth *Lost in the Funhouse* (1968), 『キマイラ』 (*Chimera*, 1972, NBA) ; Robert Coover (1932- ) 『ユニヴァーサル野球協会』 (*The Universal Baseball Association, Inc., J. Henry Waugh, Prop.*, 1968), *Pricksongs and Descants* (stories, 1969), 『ジェラルドのパーティ』 (*Gerald's Party*, 1985), *A Night at the Movie* (1987) ; William H. Gass (1924- ) 『アメリカの果ての果て』 (*In the Heart of the Heart of the Country*, stories, 1968), *Willie Master's Lonesome Wife* (1971)

### ⑥ニュー・ジャーナリズムの旗手達 特徴：零度のエクリチュールと臨場感など

Norman Mailer 『僕自身のための広告』 (*Advertisement for Myself*, 1959), 『夜の軍隊』 (*The Armies of the Night*, 1968, Pulitzer Prize [nonfiction 部門]), 『月にともる火』 (*Of a Fire on the Moon*, 1970) ; Truman Capote 『冷血』 (*In Cold Blood*, 1966) ; Tom Wolfe (1931- ) 『クール・クール LSD 交感テスト』 (*The Electric Kool-Aid Acid Test*, 1968), 『ザ・ライト・スタッフ』 (*The Right Stuff*,

1979) ; Hunter Thompson (1939- ) *Hell's Angel* (1967), 『ラスヴェガスをやっつけろ!』 (*Fear and Loathing in Las Vegas*, 1972) ; Michael Herr (1940- ) 『ヴェトナム至急報』 (*Dispatches*, 1977)

◇1970年代半頃——1980代末頃まで

時代背景 (ミーイズムの時代 [the Me-Decade] から新保守主義 [“neo-conservatism” & “new-right”] へ)

- ①国際情勢：米中国交樹立, イランでホメイニ革命, 中国, ベトナム侵攻→ベトナム (難民) のボート・ピープル (累計32万), ソ連軍のアフガニスタン侵攻, イランで米大使館員の人質事件発生, 長期化 (1979) ; ヨーロッパ各地で反核デモ (1981) ; UNEP (国連環境計画) 「ナイロビ宣言 (地球を守ろう)」 (1982) ; バイルートの米大使館爆破, ソ連軍による大韓航空機撃墜事件, 米・カリブ6カ国軍グレナダ侵攻 (1983) ; ゴルバチョフ書記長に→レーガン＝ゴルバチョフ会談, 核不戦の共同声明, 78年以降アフリカで流行していたエイズが世界に拡散し始める, アフリカ飢餓救援のための Live-Aid コンサート (1985) ; チェルノブイリ原発事故 (1986) ; ソ連軍アフガン撤退開始 (1988) ; (中国) 天安門事件, ベルリンの壁崩壊, 東西冷戦の終結宣言 (1989)
- ②国内情勢：建国200年祭, 有害物質規制法 (1976) ; カーター大統領就任, 人権外交を標榜, NY, Chicago, LA でゲイ差別反対のデモ, スペースシャトル単独飛行成功 (1977) ; Three Mile 島で原発事故; Jerry Falwell 牧師, 新宗教右翼の Moral Majority 結成 (1979) ; レーガン大統領就任, 対ソ対決姿勢を強化, 軍拡へ→財政赤字の深刻化→レーガノミックス (1981) ; NY で国際反核デモ (1982), 初の女性副大統領候補 (民主党の Geraldine Ferraro), 銀行に公的資金を注入, 79銀行が破産, 合衆国, 1913年以来初の債務国に転落 (1984) ; イランゲート事件発覚, 麻薬使用が拡大 (1986) ; 米銀行の倒産数138で史上最高, ニューヨーク株式大暴落 (ブラック・マンデー), 数百の都市で公共の建物, レストラン, 学校での喫煙禁止 (1988) ; ブッシュ (Sr.) 大統領就任, 統合参謀本部長に初の黒人就任 (Powell), ニューヨークに初の黒人市長, ヴァージニア州に初の黒人知事 (1989)
- ③文化：エイズの発生確認 (1981) ; 黒人女性のミスアメリカ初めて誕生 (1983) ; クローン羊, 代理出産 (1984) ; *Alan Bloom, The Closing of the American Mind.* (1987)

アメリカ小説

①少数民族の文学

(Native American) James Scott Momady (1934- ) *House Made of Dawn* (1968, Pulitzer Prize); Gerald Vizenor (1934- ); James Welch (1940- ); Leslie Marmon Silko (1948- ) 『儀式』 (*Ceremony*, 1977); Louise Erdrich (1954- ) 『ラブ・メディシン』 (*Love Medicine*, 1984), 『ビートの女王』 (*The Beet Queen*, 1986), 『五人の妻を愛した男』 (*Tales of Burning Love*, 1996); Sherman Alexie (1966- ) 『リザヴェーション・ブルース』 (*Reservation Blues*, 1995)

(Hispanic-American & Others) Rudolfo Anaya (1937- ) 『ウルティマ、僕に大地の教えを』 (*Bless Me, Ultima*, 1972), 『トルトウガ』 (*Tortuga*, 1979); Thomas Rivera (1935-84); Sandra Cisneros (1954- ) 『マンゴー通り、ときどきさよなら』 (*The House on Mango Street*, 1980)

(Chinese-American) Maxine Hong Kingston (1940- ) 『チャイナタウンの女武者』 (*The Woman Warrior*, 1976), 『アメリカの中国人』 (*China Men*, 1980); Amy Tan (1952- ) 『ジョイ・ラック・クラブ』 (*Joy Luck Club*, 1989), 『キッチン・ゴッズ・ワイフ』 (*The Kitchen God's Wife*, 1991); Frank Chin (1940- ) 『ドナルドダックの夢』 (*Donald Duck*, 1991)

(Japanese-American) John Okada (1923-71) 『ノー・ノー・ボーイ』 (*No-No Boy*, 1957/1976); Toshio Mori (1910-80) *Women from Hiroshima* (1978); Yoshiko Uchida (1921-92) 『写真花嫁』 (*Picture Bride*, 1987); Hisaye Yamamoto (1921- ) *Seventeen Syllables and Other Stories* (1988); Karen Tei Yamashita (1951- ) 『熱帯雨林の彼方』 (*Through the Arc of the Rain Forest*, 1990)

(Afro-American) Toni Morrison 『青い目が欲しい』 (1970), 『ソロモンの歌』 (*Song of Solomon*, 1977), 『ビラウド』 (*Beloved*, 1987, Pulitzer Prize), 『パラダイス』 (*Paradise*, 1998); Alice Walker (1944- ) 『カラーパープル』 (*The Color Purple*, 1982, Pulitzer Prize), 『喜びの秘密』 (*Possessing the Secret of Joy*, 1992)

②女性の文学 Erica Jong (1942- ) 『飛ぶのが怖い』 (*Fear of Flying*, 1973), 『ブルースを、ワイルドに』 (*Any Woman's Blues*, 1990); Judith Rossner (1935- ) 『ミスター・グッドバーを探して』 (*Looking for Mr. Goodbar*, 1975); Marilyn French (1929- ) 『背く女』 (*The Women's Room*, 1978); Marge Piercy (1936- ) *Small Change* (1973); Grace Paley (1922- ) 『最後の瞬間のすごく大きな変化』 (*Enormous Changes at the Last Minute*, 1974), *Later the Same Day* (1985); Kathy Acker (1943-97) 『血みどろ臓物ハイスクール』 (*Blood and Guts in High School*, 1984), 『ドン・キホーテ』 (*Don Quixote*, 1986), 『我が母

・悪魔学』 (*My Mother: Demonology*, 1993)

③自伝 (伝記) 体小説と歴史小説 Maxine Hong Kingston 『チャイナタウンの女武者』 (1976); Edgar Lawrence Doctorow (1931- ) 『ダニエルの書』 (*The Book of Daniel*, 1971), 『ラグタイム』 (*Ragtime*, 1975), *World's Fair* (1985, NBA), 『ピリー・バスゲイト』 (*Billy Bathgate*, 1989); Robert Coover *The Public Burning* (1977); William Styron 『ナット・ターナーの告白』 (*The Confession of Nat Turner*, 1967, Pulitzer Prize), 『ソフィーの選択』 (*Sophie's Choice*, 1979, NBA)

④実験小説 Ronald Sukenick *Up* (1968); Raymond Federman *Double or Nothing* (1971), 『嫌ならやめとけ』 (*Take It or Leave It*, 1976), 『ワシントン広場で微笑んで』 (*Smiles on Washington Square*, 1985); Gilbert Sorrentino (1929- ); Walter Abish (1931- ) 『すべての夢を終える夢』 (*How German Is It*, 1980); Ishmael Reed 『マンボ・ジャンボ』 (1972), *Flight to Canada* (1976); Clarence Major (1936- )

⑤新しいリアリズム誕生の動き (experimental realism, photo-realism, hyper-realism, ironic realism, critical realism, fantastic realism, magic realism, and dirty realism)

John Irving (1942- ) 『ガープの世界』 (*The World According to Garp*, 1978), 『ホテル・ニューハンプシャー』 (*The Hotel New Hampshire*, 1981), 『サイダーハウス・ルール』 (*The Cider House Rules*, 1985), 『未亡人の一年』 (*A Widow for One Year*, 1998); Tim O'Brien (1946- ) *Going After Cacciato* (1978, NBA), 『ニュークリア・エイジ』 (*The Nuclear Age*, 1986); William Kennedy (1928- ) 『黄昏に燃えて』 (*Ironweed*, 1983, Pulitzer Prize); Richard Ford (1944- ) 『ロック・スプリング』 (*Rock Springs, stories*, 1985), *Independence Day* (1995, Pulitzer Prize)

⑥ミニマリズム (「ニュー・ロスト・ジェネレーション」「MTV ジェネレーション」 ['downtown writing'/'blank generation fiction'/blank fiction/'bratpack'])

特徴: (1) 極小の人物, 場所, 時間, 道具立て, 筋 (2) 簡潔な文構造, 修飾語を省いた語彙, 感情をそぎ落とした文体 (3) 現在時制や2人称の使用

Raymond Carver (1939-88) 『どうかお静かに』 (*Will You Be Quiet, Please?*, stories, 1976), 『大聖堂』 (*Cathedral*, stories, 1983), 『僕が電話を掛けている場所』 (*Where I'm Calling From*, stories, 1988); Ann Beattie (1947- ) 『愛している』 (*Love Always*, 1985), 『あなたが私を見つける所』 (*Where You'll Find*

## 第二次世界大戦以降のアメリカ小説の動向

*Me, stories*, 1986) ; Frederic Barthelme (1943- ) 『ムーン・デラックス』 (*Moon Deluxe, stories*, 1983), *Tracers* (stories, 1984), *Bob the Gambler* (1997) ; Bobbie Ann Mason (1940- ) 『ボビー・アン・メイスン短編集』 (*Shiloh and Other Stories*, 1982), 『イン・カントリー』 (*In Country*, 1985), 『ラブ・ライフ (短編集)』 (*Love Life, stories*, 1989), *Feather Crown* (1993) ; Jayne Anne Phillips (1952- ) 『ブラック・ティケッツ』 (*Black Tickets, stories*, 1979), *Machine Dreams* (1984), 『ファースト・レーンズ』 (*Fast Lanes, stories*, 1987), *Shelter* (1994) ; David Leavitt (1961- ) 『ファミリー・ダンシング』 (*Family Dancing, stories*, 1984), 『失われたクレーンの言葉』 (*The Last Language of Cranes*, 1986), 『愛されるよりなお深く』 (*Equal Affection*, 1989) ; Jay McInerney (1955- ) 『ブライトライト・ビッグシティ』 (*Bright Lights, Big City*, 1984), 『ランサム』 (*Ransom*, 1985), *Model Behavior* (1998) ; Bret Easton Ellis (1964- ) 『レス・ザン・ゼロ』 (*Less Than Zero*, 1985), 『アメリカン・サイコ』 (*American Psycho*, 1991) ; Mona Simpson (1958- ) 『ここではないどこかへ』 (*Anywhere But Here*, 1986)

### ⑦ 「ポストモダン」小説第2世代、第3世代

第2世代 Don DeLillo (1936- ) 『ホワイト・ノイズ』 (*White Noise*, 1985, NBA), 『リブラ・時の秤』 (*Libra*, 1988), 『マオ II』 (*Mao II*, 1991) ; Paul Auster (1947- ) 『シティ・オブ・グラス』 (*City of Glass*, 1985), 『ムーン・パレス』 (*Moon Palace*, 1989) ; T. Coraghessan Boyle (1948- ) *The Descent of Man* (stories, 1979), 『ごったまぜ』 (*Greasy Lake and Other Stories*, 1985), *If the River Was Whiskey* (stories, 1989), *Water Music* (1982), *Budding Prospect* (1984), *World's End* (1987)

第3世代 Steve Erickson (1950- ) 『彷徨う日々』 (*Days Between Stations*, 1985), 『ルビコン・ビーチ』 (*Rubicon Beach*, 1986), 『黒い時計の旅』 (*Tours of the Black Clock*, 1989) ; William T. Vollmann (1959- ) *You Bright and Risen Angels* (1987) ; David Foster Wallace (1962- ) 『ヴィトゲンシュタインの箒』 (*The Broom of the System*, 1987), 『奇妙な髪の少女』 (*Girl with Curious Hair*, stories, 1989) ; Richard Powers (1957- ) 『舞踏会へ向かう三人の農夫』 (*Three Farmers On Their Way to A Dance*, 1985)

### ◇1990年代——現在まで

時代背景

- ①国際情勢：イラク軍のクエート侵攻，東西ドイツ統一（1990）；湾岸戦争勃発，ユーゴ内戦突入，ゴルバチョフ大統領辞任，ソ連邦解体（1991）；ボスニア・ヘルツゴビナ，ユーゴから独立宣言，国連，ユーゴへ平和維持軍派遣（1992）；英で狂牛病の恐怖（1996）；英でクローン牛誕生，京都で地球温暖化防止会議（1997）；9/11，ニューヨーク世界貿易センタービル，テロにより崩壊，10月，Bush テロ撲滅戦争に乗り出しアフガニスタン出兵（2001）；3/19 国連安保理の決議なしで英米イラク先制攻撃，フセイン政権打倒（2003）；秋，Bush 訪日，日米首脳会談（京都御苑）（2005）
- ②国内情勢：クリントン大統領就任，「アメリカ再生」を宣言，イスラム原理主義者による NY の世界貿易センタービルへの爆弾テロ，Washington で差別撤廃を訴える同性愛者100万人のデモ（1993）；LA 大地震（1994）；米議会通信改革法可決（「情報ハイウェイ」構想の促進）（1996）；クリントン2期目就任，女性初の国務長官（Madeleine Albright）（1997）；コロラド州で高校生による銃乱射事件で15人死亡（1999）；ブッシュ（Jr.）大統領就任（2001）；Bush, Jr. 2期目就任，8月末大型ハリケーン「カトリーナ」ニューオーリンズを襲う，死者多数（2005）
- ③文化：Arthur M. Schlesinger, *The Disuniting of America*. (1992)；Francis Fukuyama, *The End of History and the Last Man*. (1992)；Windows 95, 世界各地で一斉発売（1995）；Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of the World Order*. (1996)；Eudora Welty, A. R. Amos 没，NBA: Susan Sontag, *In America*. (2001)；NBA: Jonathan Franzen, *The Corrections*. (2002)；Edward Said 没，NBA: Julia Glass, *Three Junes*. (2003)；Jacques Derrida 没（2004）

アメリカ小説

①リアリズム

John Updike 『さようならウサギ』 (*Rabbit at Rest*, 1990, Pulitzer Prize)；Charles Johnson (1948- ) 『中間航路』 (*Middle Passage*, 1990, NBA)；Tim O'Brien 『本当の戦争の話をしよう』 (*The Things They Carried*, 1990), *In the Lake of the Woods* (1994)；Cormac McCarthy (1933- ) 『すべての美しい馬』 (*All the Pretty Horses*, 1991, NBA)；Jane Smiley (1949- ) 『大農場』 (*A Thousand Acres*, 1991, Pulitzer Prize)；Toni Morrison 『ジャズ』 (*Jazz*, 1991), 『パラダイス』 (1998)；Leslie Marmon Silko *Almanac of the Dead* (1991), *Gardens in the Dunes* (1999)；E. Annie Proulx (1935- ) 『港湾ニュース』 (*The*

## 第二次世界大戦以降のアメリカ小説の動向

*Shipping News*, 1993, NBA/Pulitzer Prize), 『オールド・エース』 (*That Old Ace in the Hole*, 2002); Charles Frazier (19??- ) 『コールド・マウンテン』 (*Cold Mountain*, 1997, NBA); Ha Jin (1956- ) 『待ち暮らし』 (*Waiting*, 1999, NBA); Philip Roth 『ヒューマン・ステイン』 (*Human Stain*, 2000); Jonathan Franzen (1959- ) 『ザ・コレクションズ』 (*The Corrections*, 2001, NBA)

### ② 「ポストモダン」小説

#### 第1世代

John Barth 『船乗りサムボディ最後の船旅』 (*The Last Voyage of Somebody the Sailor*, 1991), 『ストーリーを続けよう』 (*On with the Stories*, 1996); Thomas Pynchon 『ヴァインランド』 (*Vineland*, 1990), *Mason & Dixon* (1997); Kurt Vonnegut 『ホーカス・ポーカス』 (*Hocus Pocus*, 1990), 『タイムクエーク』 (*Timequake*, 1997); William Gaddis *A Frolic of His Own* (1993, NBA)

#### 第2世代

Don DeLillo 『アンダーワールド』 (*Underworld*, 1997), 『ボディ・アーティスト』 (*The Body Artist*, 2001), 『コスモポリス』 (*Cosmopolis*, 2003); Paul Auster 『偶然の音楽』 (*Music of Chance*, 1990), *The Book of Illusions* (2002), *Oracle Night* (2003); T. Coraghessan Boyle 『東は東』 (*East Is East*, 1990), *A Friend of Earth* (2000)

#### 第3世代

Steve Erickson 『Xのアーチ』 (*Arc d'x*, 1993), 『アムネジア・スコープ』 (*Amnesiascope*, 1996), 『真夜中に海がやってきた』 (*The Sea Came in at Midnight*, 1999); William T. Vollman 『ハッピーガールズ, バッドガールズ』 (*13 Stories & 13 Epitaphs*, 1991), 『蝶の物語たち』 (*Butterfly Stories*, 1993), 『ザ・ライフルズ』 (*The Rifles*, 1994), *The Atlas* (1996); David Foster Wallace *Infinite Jest* (1996); Richard Powers 『ガラティア 2.2』 (*Galatea 2.2*, 1995), *Gain* (1998), *The Time of Our Singing* (2003)

※※※※

### 参考資料 2

モダニズムとポストモダニズムの対照図

—Ihab Hassan, *The Postmodern Turn*, p. 91.

Modernism

Postmodernism

\*Form (conjunctive, closed)

\* Antiform (disjunctive, open)

(形式 [結合的, 閉鎖的])	(反形式 [分離的, 開放的])
* Purpose (目的)	* Play (戯れ)
* Design (意匠/デザイン)	* Chance (偶然)
* Hierarchy (階層秩序)	* Anarchy (無秩序)
* Art object/Finished work (芸術対象/完成作品)	* Process/Performance/Happening (プロセス/パフォーマンス/ハプニング)
* Creation/Totalization (創造/全体化)	* Decreation/Deconstruction (解体/脱構築)
* Synthesis (ジントーゼ, 定立)	* Antithesis (アンチテーゼ/反定立)
* Presence (現前)	* Absence (不在)
* Centering (中心化)	* Dispersal (拡散)
* Genre/Boundary (ジャンル/境界)	* Text/Intertext (テキスト/インターテキスト)
* Paradigm (<文法>変化系列)	* Syntagm (<文法>統語の関係)
* Metaphor (隠喩)	* Metonymy (換喩)
* Root/Depth (根幹/深層)	* Rhizome/Surface (リゾーム, 表層)
* Interpretation/Reading (解釈/読み)	* Against Interpretation/Misreading (反解釈/誤読)
* Signified (シニフィエ)	* Signifier (シニフィアン)
* Lisible (Readerly)	* Scriptible (Writerly)
* Narrative/Grand Histoire (ナラティヴ/大きな物語)	* Anti-narrative/Petite Histoire (反ナラティヴ/小さな物語)
* Master Code	* Idiolect (個人言語)
* Type (典型)	* Mutant (変異体)
* Genital/Phallic (生殖器的/男根的)	* Polymorphous/Androgynous (多形的/両性具有的)
* Paranoia (偏執症的)	* Schizophrenia (精神分裂症的)
* Origin/Cause (起源/原因)	* Difference-Différance/Trace (差異=差延/痕跡)
* Determinacy (決定性)	* Indeterminacy (決定不能性)
* Transcendence (超越)	* Immanence (内在, イマネンス)

1. Hassan の対照図を見れば歴然としていますが, そこには1970年代の初め頃

から注目されるようになったポスト構造主義 (poststructuralism), とくに西欧世界の音声中心主義, ログス中心主義を脱構築 (deconstruct) した Jacques Derrida の影響が濃厚に見て取れます。poststructuralism は, 1950年代から60年代にかけての構造主義 (structuralism) に対する批判から生まれたもので, 構造主義を, その共時性のゆえに歴史を排除する傾きを持つ点, 表層の背後に一つの構造という単一体 (monad) あるいは全体性を措定する点, 閉ざされた構造はその構造内からではその公準性や自立性を証明できないというゲッデル (Kurt Gödel) の定理 (Gödel's theorem) などの点から批判しました。Derrida は, エクリチュール (écriture), 差異 (différance), 痕跡 (trace), エスパスマン (espacement), 代補 (supplément), 散種 (dissémination) などの概念を駆使して, 西欧世界の現前性信仰を突き崩したのですが, この現前性への信仰, つまりは grand narrative への信仰は, Hassan も彼の分類リストで示しているように, modernism の信仰箇条の重要な一項目だったのです。

## 2. Derrida の脱構築と文学批評

このような Derrida による西欧形而上学の脱構築は, 文学や文学批評に対して大きな影響を与えました。彼の脱中心化, 意味の決定不能性の主張は, 解体批評を生みだし, 解体批評は Feminism 批評に大きな影響を及ぼし, また, New Historicism を, 更には Postcolonialism を生みだすこととなります。解体批評家たちは, まさしく Derrida 流に, 一連の伝統的な narrative に関する諸概念, 例えば始まりと終わり (origin and end), 統一性と全体性あるいは全体化 (unity and totality or “totalization”), 基礎となる「理性」あるいは「根拠」(underlying “reason” or “ground”), 自己, 意識あるいは「人間性」(selfhood, consciousness, or “human nature”), 時間の同質性, 直線性, 連続性 (homogeneity, linearity, and continuity of time), 必要とされる進歩 (necessary progress), 「運命」「宿命」あるいは「天命」(“fate,” “destiny,” or “Providence”), 因果律 (causality), 徐々に姿をあらわす意味 (gradually emerging “meaning”), 表象と真実 (representation and truth) といった概念に対して, これらとは相反する一連の概念, たとえば「始まり, 終わり, 連続性などの概念」に置き代えて, 「反復, 相違, 不連続, 開放性, 個々の人間のエネルギーの自由かつ相互矛盾的な葛藤」といった諸カテゴリー (The categories of repetition, of difference, of discontinuity, of openness, and of the free and contradictory struggle of human energies) ——これらの一つ一つはそれぞれが解釈の中心と見なされる, つまり, 作品全体が誤解釈されるということを意味するのですが——を置き, テキスト

に対していわゆる double reading を試みました。Feminism 批評は textualism 中心の Derrida の脱構築の方法を政治的方面に用いたものに、さらに Foucault を加えて、従来からの性差別の問題等の脱構築を試み、また New Historicism は、Roland Barthes や Derrida の text, intertextuality の概念を手がかりに、歴史記述や文学 text の脱中心化を目指したものです。

3. 60年代に、いわば第1世代の postmodern 小説家が現れた頃は、Derrida はまだ知られていませんでした。そして、当時は postmodern という言い方も時々散見されるだけで、これら第1世代の postmodernist たちは、ブラック・ユーモリスト (black humorist), あるいは、ファビュリスト (fabulist) と呼ばれ、自己回帰的な小説を書いた場合にはメタフィクションニスト (metafictionist) と呼ばれました。また、多様性の時代の中で彼らを postmodern 的小説を書くにいたらしめた思想的な支えは、主としてアインシュタイン (Albert Einstein) の相対性理論 (Einstein's theory of relativity) とハイゼンベルグ (Werner Karl Heisenberg) の不確定性原理 (Heisenberg's uncertainty principle) であったと考えられます。

そして postmodern 小説家の第2世代と呼ばれた Don DeLillo (1936- ), Tom Robbins (1936- ) などを経て1980年代後半になると、1950年代以降生まれの第3世代の postmodern 小説家ともいべき作家達、つまり情報過剰で、テレビやその他のメディアを通してシニフィアン (signifiant/signifier) が乱舞し、シミュラクラ (simulacra) とシミュレーション (simulation) とがはびこる postmodern 的状况の中で生まれ育ち、Derrida による脱構築の洗礼を受けた上で、Derrida 以後の新しい世界像をなんらかの形の自律的秩序論 (社会システム論, 生命論, 遺伝子学など) に似た形で見いだす、あるいは構成しようとしているかに見える、William T. Vollman (1959- ), David Foster Wallace (1962- ), Richard Powers (1957- ) といった作家達が登場してきます。

第1, 第2, 第3世代をひっくるめて postmodern のアメリカ作家達に共通しているのは、modernism と postmodernism との違いについて述べたときに挙げた postmodernism の諸特徴です。それらの諸特徴を念頭に思い浮かべれば、postmodern のアメリカ小説が realism 小説, modernism の小説に比べて、その内容および手法において、想像を絶するほどの多種多様さを呈し得ることが理解できるでしょう。要するに、postmodern のアメリカ小説は、テキストの pastiche 化が進み、ファンタジー, 寓話, SF, 探偵小説, 歴史小説などの大衆小説のジャンルを借用した異次元・異時間・異空間世界の創造や、

それらの異世界同志の並置、並列があったり、小説空間の構築に際し作者を作中に登場させたり、あるいは、挿し絵、写真の取り込み、タイポグラフィカルな諸々の工夫を加えることで、言語の記号性やフィクションのフィクション性を再帰的に表出させたり、その他もろもろの手法がみられる、何でもあり的状态だということです。それにしても、これらの多種多様さはいったい何のための多種多様さでしょうか。

この点に関して、Brian McHale が *Postmodernist Fiction* (1987) の中で modernism と postmodernism との間の本質的な相違について述べている言葉は注目に値します。彼は Roman Jakobson の “The Dominant” という概念を借り、modernism の Dominant は 認識論 (epistemology) であり、postmodernism のそれは存在論 (ontology) であると述べているのです。彼は、modernism と postmodernism の基本的な相違をこのように捉え、postmodern 小説の特徴とは、用いられる方法は異次元・異空間世界の並置、言語による構築物としての不安定な現実の設定、作中人物としての作者の登場などさまざまだが、小説世界を存在論的に不安定 (不確か) に構築し、Dick Higgins の言葉を借りれば、post-cognitive に、「これはどの世界か。この世界の中で何がなされるべきなのか。私の自我のうちのどの自我がそれを行うのか」を問いかけること、あるいは、「文学テキスト自体についての存在論的問いかけを、でなければ、文学テキストが投影する世界についての存在論的問いかけを行う」ことだと言っているのです。ロゴス中心主義の拒否、grand narrative の拒否、社会認識や言語に対する自然的態度の拒否とともに、認識論から存在論へのパラダイム転換は、modernism から postmodernism への転換を意味する中心的な相違なのです。換言すると、postmodern 的状況とは認識論的ではなく、存在論的に現実を把握することを要求されている状況だということなのです。

存在論的に不安定に構築されたテキストとは、modernism 的な readerly なテキストではなく、writerly なテキストだということになります。読者にとっては取り組むのが楽ではないテキストだということです。というのは、存在論的に不安定に構築されたテキストには、当然、master narrative は存在せず、あるのは context-specific な local narratives だけで、中心も存在せず、marginality しかないからです。さらに、postmodernism では origin や causality といったものすら否定されてしまいます。いきおい、テキストは断片化 (fragmentation) し、文脈の断絶 (disruption)、ずれ (dislocation) を引き起こすこととなります。causality の否定という言葉からは plot から story への移行ということが想

像されますが、この言葉が意味するところはその程度に留まらず、narrative は始まりと終わりを持つがゆえに coherence の存在を主張する、つまり narrative は ideological nature を持つとして、narrative そのものを否定的に捉え、それを具現しようとするところまでいっているほどです。電子テキストにみられるシャッフル・テキストの出現は、この主張を考えると、単なる実験的な試みとは思えなくなります。

postmodern のアメリカ小説を読むには、現代思想や現代科学の諸理論についての知識を要求されるという側面があり、また、たしかにテキストそのものも読みづらく、意味の決定不可能なところがあるかも知れません。しかし postmodern 小説には、手法の上で、またテーマや現実認識の仕方などに関して、realism や modernism の作品には見受けられない種類の新機軸の発見、哲学的示唆や隠された意匠の発見という大きな悦びがあります。現代の我々は、フランスのメディア理論家 Guy Debord が言うところの “the society of the spectacle” の中に住むことを余儀なくされ、Marshall McLuhan が言っているように、テレビを中心とするメディアのインフレーションによって、時間や空間が崩壊し、「経験」が継ぎ目のないモザイク模様 (a seamless “mosaic” of experience) と化し、歴史の “dehistoricizing” がますます進行するかに見える中で生きているわけですが、そういった状況下に置かれている我々にとって、postmodern 小説を読むということは、自らの存在について、そして世界について、世界外からではなく、世界内に身を置いて存在論的に問いかね、世界というテキストの中で自分自身のテキストをニーチェ的に構成 (shaping) していくことを促す営みなのです。

※※※※

### 参考資料 3

#### 第二次世界大戦後の文学批評の動向

形式主義 (神話 [原型]) 批評 (1940年代後半～1960年代半頃)

Northrop Frye/Richard Chase/Francis Fergusson/Leslie Fiedler/Daniel Hoffman/  
Stanley Edgar Hyman/Northrop Frye (*Anatomy of Criticism* 1957)/William Troy/  
Maude Bodkin

マルクス主義批評 (in 1930, reborn in 1960s)

Terry Eagleton/Fredric Jameson

## 第二次世界大戦以降のアメリカ小説の動向

構造主義批評 (1950s~1960s)→記号論 (1970s~)

R. Barthes/T. Todorov/J. Genette

ポスト構造主義

解体批評 Deconstruction (1970年代前半~80年代半ば)

Harold Bloom/Paul de Man/Geoffrey Hartman/J. Hillis Miller; Shoshana Felman/  
Barbara Johnson/Jeffrey Mehlman/Gayatri Chakravorty Spivak

フェミニスト批評 (the end of 1960s~1990s)

Kate Millet (*Sexual Politics*, 1970), 女性の文学へ焦点集中→Gender Criticism  
[Julia Kristeva, androtext→gynotexts 70年代半頃から]→Gay and Lesbian  
Criticism (1990s)→Queer Theory (1990s)

新歴史主義 (1980初~)

S. Greenblatt

Postcolonialism (late 1980s~)